特 10
901

序

我ヶ朝往古の將師の征伐等の事あるにあらざれバ敢て冠を脱せずと桓武帝の朝に當り蝦夷頻りに叛き又た屢々内亂あり此際外に在りて多年干戈に從事し遂に之を征伏又た嵯峨帝の御宇に藤原仲成の亂を鎮定したる坂上田村麿呂ハ智仁勇略兼ね備はりし英雄にて容貌魁偉目は鷹隼の如く髯は銀線の如くにして一トたび瞋目する時は彼の長板橋に於て百萬の大軍を睥睨せし張飛の眼光より猶は鋭尖く如何なる猛獸と雖も皆習服すと況んや人間に於

てをや誰か能く之に敵する者あらん故に蠻夷を征服せしならん然れとも又た平居衣冠を製ひ人と談笑する時ハ婦女幼童も馴れ親しむと書肆明三閣今將軍の傳を出版せり是れ必らず婦女幼童の喜ぶものと聊か鑒定を述ぶ

明治廿年五月

竹葉舍晉升

特10
901

田村三代記

○星帝誕生記

夫倩々世間萬變和漢帝愛靜謐華麗考へ見るに誠に大慈大悲觀世音長閑に住る春の日の治る御代なそ目出度けれ爰に都に於て音羽山清水寺を御建立被成ける田村三代の御由來を委しく尋ね奉るに人皇五拾代桓武天皇の御宇に當りて都に不思議の大變出ふける故を委敷尋ぬるに帝より南未申に當りて八尺余りの星一ッ出ふける高きも賤きも此星見る者ハ忽地病を引請る帝彼星を叡覽有て忽ち御惱と成給ふ公卿大臣驚き種々に手を盡そと雖とも其甲斐無りける天學者阿部康光を召れ急ぎ一參仕つき畏まりしと紫震殿の角の間に取籠り壹ハよふ文唱へ六十二の暦に八十三の算木をぐせら〱と投付け表百年裏百年十二のゑとを考へ居たりしか良有て横手を打て才様帝の御惱ハ尋常のとふましまさす南の空成る惡星を御叡覽まし〱て御惱とならせ給ふなり去ながら化星の内より觀音利生の若君誕生ましまそに相違無く吏ハ御祈禱仕つらんと淸涼殿に檀を飾りとつて花皿鈴錫杖五色の幣帛を振立〱かんたん碎き三日三夜の御祈禱音に聞得て由々敷けれふしきやな此星御祈禱の奇特故か忽ち南北へ失にけり玉躰御惱次第に晴させ給ふ大臣悦び博士ふれ過分の御褒美與へけり是ハ扨置其頃丹波國の百姓右衛門作と云者あり丹波と丹後の

國境にて星の中より生れたる若を壹人拾ひたり右衛門作不思儀に思ひ取上見るに弓手の御目に觀音御來光馬手に栗柄不動三尊立せ給ふ右衛門作不思儀に思ひ是ハ尋常ならず佛菩薩の再來の若に違ひなし御地頭へ申上んと件の若を指上る中富中納言秀康ふしきにおもひ我計らひならずと若をいたき參内有て此所以を奏聞す帝御簾高く揚させ給ふて彼若を叡覽有て誠に博士の云如く星の中より誕生したるに相違なし能々守立申可との宣旨を畏まつて中納言彼若をハ乳母を數多付置て能に養育被成ける誠に此若の御成人背にはへたるたゝんなの夜中の露にはてくまれ尺に昇るか如くにはや三才に被成玉ふ才知世に越させ他の子の五六才かと見得ける元より怜悧聰明にて一字を習ひ十を知り十を學んて百字を悟り光陰ハ矢の如し五六才早過て御歳七ッと申にハ誠に怜悧世に越てはや拾歳に成給ふ其行拔群に見へけれハ帝叡覽あらせられ其若が丈を指て見よとの宣旨を畏て中納言彼若かせいをさすに身の丈五尺八寸三分と証ハ見へにける帝又一入の御感なり誠に稀成る若なれハ元服せんよとの宣旨を則ち五條中將年春に任せられ冠裝束を給ハりて昇殿をゆるされける扨其後ハ宣旨にハ如何に年春汝ハ天竺より下りし者なれハ天にハ十二の星の舞有と聞朕が前にて一さし舞との旨宣を年春畏り宣旨の如く天竺ハ淨梵淨往正のうてなと云國にて十二の菩薩の舞遊ひ先日本の下梵下往蘆原の國にてハへハ菩薩の舞ハ勿体な

しと奏問する玉躰甚と逆鱗まし〳〵て如何に年春我十善萬乘の御位の朕か前にて一さし舞とて何の子細か有へきぞ朕をあさむきし曲者はや退けとの宣旨にて北陸道ハ越前の國三國ヶ浦へと流さるいたはしや年春ハよし無きことを奏問なし三國ヶ浦の浮住居目も當られぬ賤けき小屋になまします喰事と申せハ都にて歌にハ詠と喰さる粟やひゑを飯となそ餘りのとの淋しさに歌を詠み詩を作りゝん竹のよふてふ世を籠て八ッの歌口床夏の花の露にて打しめし雲井にはつと打揚て日夜共なく吹給ふなら面白や笛の音と浦人共是を聞配所の殿ハ面白き竹を鳴させ給ふと我も〳〵と聴聞を是ハ扨置此山陰にハ名をハ繁井ヶ池に住居する龍差と云大蛇なり彼笛を聞よりも扨面白の笛の音や我ハ龍差の身なれ共五衰三熱の苦しみ深し如何にもして彼笛聞ならハ三熱の苦しみ遁れんと蛇身の姿を忽ちに眉目能女と顯れ夜更て配所に通ひ笛を聴聞またりけるにしきやな此女夜たに明れハいつしか失て日たに暮れハ通ふ之年春ハ御覽して如何に女中よの者ハ日に通ひ夜にさへなれハ歸る之御身未二八の者なるが夜更て是へ來るなり子細ハ如何にと仰せける女畏り御不審な御尤も自ハ此山陰の長者が水婢でしが晝ハ主人の奉公なけゝれハ通ふて聴聞なりゝたし夜更て是へ來るなり哀れと思し召れぬかと馴々敷ぞ語りける年春此由聞よりも扨ハ不便の次第之更ハ吹て聞せんと宣ひて様々笛を遊ひける女ハ此笛聞よりもなら面白の笛の

昔と年春の御前近ふ立寄れハ年春余りの淋しさふ女になじませ玉へ互ひよ打語らひ打解て終にハはらませ給ひける角て月日を經る程に不思儀な此女懐妊後一年二年早過て三年ふてそれ成給ふ年春ハ御覧して如何に御身ハ此山陰の賤の女と申せしか常に來る人も無く剰さへ三年を是にて送るおり子細あらめと仰せ之女ハ承まり拙自ハ賤の女とハ申せども天竺にてハか君の御笛面白さふ天下りて聴聞之たる咎よより天の羽衣奪はれて二度天に行へき様も無し是にて月日を送る之年春御覧して夫ハ兎も角もあれ惣て人の臨月といふハ心經の文字の數二百七拾四箇日に究れり御身ハ三年ふなりけれと産の紐を解ぬハふしぎ之女承まり仰せは尤もふれハゝ日の本の臨月ハ月を主計て九月半なり當る十月か臨月あれと惣して天の習ひにて三年三月に究りたる自も三年三月ふてハ得ハ早臨月に當つてハ之水の邊よて産の紐を解き申たし此山陰ふ繁井ヶ池に極丈高く屋倉を揚産屋をから繰給ふへし早疾々と申あく年春心得ハと浦人共よ仰せ給ひて山陰なる繁井か池に極丈高く屋倉を揚け頓て産屋をうらくり年春悦び如何ふ女産屋ハ出來ハぞ女承りあは有難き次第之然しながら曳よ願ひのハそやなせと申に百日過ぬ其内ハ往來を留て給ふべし百日過ぬ其内ハ君も産屋をは覧被成間敷百日百夜か立ならハ玉の様なる若をいたき參らん去ハは暇乞申迚繁井ヶ池へと急ぐる、然るに年春ハ跡にて壹人月日を送らせ爲ふ所ふ程ふく九十九

夜ふも成けれハ余り床敷思し召配所を立出繁井か池へと趣きて彼所なる産家をは覧被成しにあら恐敷や櫓の上にハ廿尋の大蛇顯ハれて眼の光りハ日月の如し紅ゐの舌を巻出し十六の角ハ冬枯の木々の稍の如く之鱗逆立おまろの合より玉の様成る若をいたき乳を含めて居たりける年春は覧してあら恐敷の大蛇やと配所を指て逃給ふ配所に歸りて口説とこそ哀きえよしなき女に契りを迷習日にもならハあの大蛇若をいたきて參らんか其時こそハ何と爲べきとぞとて暫し泪よむせ給ふ角て其夜も明けれハ件の大蛇ハ又も姿を變して眉目能女と顯ハれて配所にみそれまんつ〳〵と來りけるのふ如何に我君よ御約束の甲斐もなく産屋を御覽じ給ふこそ思へハ〳〵恨しや貴て此子り三才ふ成迄も止り度ハ思へ共殿に姿を顯ハせハ留るとハ叶ぬ之如何に此若ハ末に果報、由々敷生れ之母か名殘も是迄ぞ去ハ形身を得させんと神通のりふら矢一對取出し母か形身と長く見よは暇乞申夫の殿名殘惜や此若とかげろう稲妻水の月消て姿ハ無りける年春ハは覽してこハ何事ぞ情無や貴て此子が三才ふ成迄も止り呉よと歎け共更ふ共りひ無りけり懸る所に西の空かすかに浮聲のあられける如何に年春我を誰と思ふらん兼て信心する八幡大菩薩之日本惡魔降伏の爲ふ大蛇に契りを込させて其若を授けたり此事都へ聞得なハ早速に綸旨下り親子ハ目出度歸洛なるべきぞ行末守るぞ信心怠るなかれといふかと聞ゑて白鳩と現じ西の空よ飛給ふ年

春ハ有難し有難やと虚空を三度伏拜みなれ共別れハ悲しく如何に此若縦令八幡宮の御授けなれハ迚乳房の母に別れてハ何とて育つや此若と聲を揚てぞ泣給ふなれ共叶ハぬとなれハ浦人共の情にて彼若を能々養育被成ける年春の心細さハ限り無く是ハ扨置此事四方に陰無花の都にもれ聞得都にてハ臣下大臣を召れて奥よりの宣旨にハ年春へ赦免の綸宣可被下との御諚ニ畏て中納言勅使として三國ヶ浦へと下らるゝ配所に至りて年春に對面し勅諚の趣きにハ赦免の綸旨を被下るこハ有難しと年春ハ敬つて拜し奉る夫よりも浦人共に暇を乞若君を相伴ひ三國ヶ浦を立せ給へハ浦人共ハ御名殘を惜まれて我も〳〵と御門送りをなし奉る名殘ハ盡とあれハ去ハ〳〵と別れつゝ都を指て登らるゝ斯て帝都になりけれハ時の裝束改正めて內裏へぞ參內を御階近ふ平伏を帝ハ御簾高く巻揚させ給ふ奥よりの宣旨にハ如何に年春汝左も無事になり長々の罪科陳や不便の次第ニ然共汝ハ大蛇に緣を求め若を設けたるとの叡聞ニ是に召との勅定ニ年春ハ畏て若を召つれ御階近く畏る帝つく〳〵叡覧あり不思儀やな此若ハ大蛇ハ胎內に宿りたる者なれハ迚大蛇丸に任せらる能に育ておけとの宣旨にて年春ハ御請を申彼若に乳母を附置て能々養育被成ける光陰ハ矢の如し早三才に成給ふ賢さとハ世の常の子五六才に見えにける早年月を經程に十三才に成給ふ其丈ばつくんに見えけるか帝つく〳〵叡覧在し元服させよと宣旨にて十三の年

重ねて二條の中納言年光に任せられ直に二條堀川に御殿造りを被成ける樣にむね門内に屋形を建並へ誠に由々敷榮へける是ハ扨置其頃ハ大和山城の境なる今瀬ヶ淵にハ大蛇ヶ住萬民の難儀と成故に兩國より都への早打ハ櫛の齒を挽が如し帝大に驚かせ給ひ油斷のしてハ叶なム間敷年光を召との宣旨之頂て勅使を立らるゝ何事ならんと年光ハ時の裝束改めて急ぎ參内あり其時の宣旨に汝を召と別儀にあらず山城大和の境ある今瀬ヶ淵に大蛇ヶ住萬民を惱ますそ故汝ハ大蛇め胎内に宿せし者なれバ是を退治仕つれとの院宣之年光ハ畏り急ぎ內裏を退出有り二條の御所にも成ければ吉日を撰まれて御裝束を被成ける肌にハ白き練絹を召甲綴の大鎧同毛の甲を召れ金作りの太刀をはき村重藤の五人張神通の鏑矢笞高に負ふして駒に取てハ明三才の逸物に金覆輪の鞍置て御身輕けにゆらと召惣して御供二百余騎指替を引具して今瀬ヶ淵へと急かるゝ彼所に至れバ淵に向て二百余騎時をつくらに上にける年光ハ馬を一陣に乘出し大音揚け如何に此淵に住居する大蛇汝化粧するに依添けなく二條中納言年光帝よりの宣旨を蒙り汝を退治に向ふと尋常に顯はれ勝負をせよと呼ハつたり然る所に不思儀やな淵色五色に替ると見えけるか逆卷浪を押分かき分長廿尋の大蛇顯はれ眼を瞋らし紅ゐの舌を出し炎をはき懸け年光を目懸け只一口と白眼寄二百余騎の軍卒共南無三寶大蛇が顯ハれたるぞと跡をも見ずして迯にける年光此由御

覽して望む所の大蛇なるはと五人張に神通の鏑矢を取てからりと打つかへ本筈末筈一ッになれと引しぼり暫堅めて放つ矢ハ何かハ以て溜るへき其矢ハあやまたそ大蛇の眉間に矢ふくろ責て立にける不思議やな大蛇ハ消て姿ハ無りける五色の浪も靜に年光此よし御覽してあハ何事そ情無や大事の宣旨を蒙る身か大蛇の姿を見失なひ殊に母より給ハりける神通の矢を失ひしと口惜や此上ハ巴水の底火の底ならくの底迄もくゝられくゝれ安穩に置へきやと鎧物の具ぬき捨玉ひ金作りの太刀を口に啣へ淵にさんぶと飛込んたり爰や彼所を探さるゝ二百余騎の御供ハ我君樣ハ大蛇のゑおきさと爲成玉ふかと周章狼狽ゐたりけるあれ共年光水練の達者にて爰の隅彼所の隅尋ねける戌亥に當つて僅の淵を御覽して千尋の底へと潛らるゝ五色の浪へ分入て御覽し玉へハ以前の大蛇ヶ眉間に矢を脊負ひ高うありしてみそ伏居たり年光大音揚如何に大蛇微勞なり日本無双の年光ハ大事の勅諚蒙りて汝ヶ姿を見失へ是迄追懸來るそや迯して勝負を仕れ然る所に龍の左右を守る毒蛇毒女是を見て我君樣の敵そと其冠者を迯そなと一度にとつど馳集まり年光へ向ハんとそる所其時大蛇大聲揚ヤア毒蛇共必そ麁相致そなよ添けあくも其御先祖ハ星の中より御誕生遊はして五條中將年春公其若君ハ三國ヶ㵎繁井か池の大蛇の胎内に三年三月宿られて御誕生ましますゝ夫に依て繁井ヶ淵の大蛇こそ今ハ成佛致されて大蛇の苦現を兎かれて龍神とあ

それ顯はれたり我も又其若君の御手に懸れは神や佛と成へきそや必す鹿相を致そまじと主人の仰せに畏り毒蛇毒女は元の所へ立歸り働く所存は無りける若君此由御覧して頼母敷大蛇かな更は汝を我手に懸け五衰三熱の苦しみを除て與んと宣ふて小金作りの御佩刀そらりと拔はなし丈廿尋の大蛇をずた〳〵に伐らせ給ふ大蛇の角と牙とを打切たり神通の鏑矢相違なく持せ給へ淵を潜り岸に浮はせ玉ひ直ぐに陸に上られける二百余騎の御供いては我君樣再度世に歸らせ玉ふ迚御馬に乘せ奉つり淵に向つて鬨の聲を揚つゝ都を指ては歸陣は目出度かりける次第之帝都に着や直に內裏へ參內あり御階近く畏る今瀨ヶ淵の事共を不殘奏問被成ける大蛇の角と牙を捧らる帝つく〴〵叡覧あり誠に汝は國土を騷かす大蛇を退治の段神妙之去に依て此度の御褒美として時の武將に任せられ冠裝束給はりて昇殿を許されけるには有難しと年光は急ぎ御殿を退出有り直に大蛇の角と牙を九條の羅生門の戌亥の方に當りて角田の明神と祝立て扨夫より年光は二條に入らせ玉ひつゝ三日三夜の御祝儀は花も咲かと見えにける帝都を守護し奉る武家の政道執行ひ四海の浪も靜にて治る御代まそ目出度かりける次第なり

去程に茲に三ッの災ひ出來にける其頃出羽奧州とすそれ國司無れは國治らす大名は境を爭そひ又地頭は百姓へ惠無けれは百姓は地頭へ向ひ竹弓を引心なれは夷はまやもに向つて半弓毒矢を

放こと夥多し國土の乱甚だし何卒能國司を下し給れと出羽奧州より都への早打は櫛の歯を引か如くに帝大に驚かせ給ひ油斷をしては叶ふ間敷と早速年光を召との宣旨に賴て勅使を立らるゝ何事やらんと年光は御裝束を遊ばして急ぎ參內せられける其時の宣旨には汝を召と別義にあらす出羽奧州に國司無れは國治らそ大義なから奧州に下り三ヶ年國司を致し目出度國政を執行ひ然して上洛を被致よ扨又國司に下るには身分無ては叶ふ間敷依て鎮守府將軍陸奧守に任せられ冠裝束を給はりたりては有難しと將軍は急ぎ御殿を退出す二條の御所にて吉日を撰み御家の郞等霞の源太森隈其外二百余騎引具して奧州指て下らるゝ此事四方に隱れなく出羽奧州へも聞えたり兩國の諸大名此事を聞此度都より國司下らせ給ふ之國司の御先祖は星の內より御出生坐在して五條中將年春公の御子息今度の國司は三國ヶ浦の繁井か池に住居せる龍差玉と云大蛇の胎內に三年三月宿らせて御出生坐在ぱ尋常の人でなしとサア下らぬ先より恐をなせば今は諸大名皆々和合して國司の御迎へに白川一所の關へと詰にける斯て將軍は夜を日に繼て下り奧州に御着有けれは諸大名に御對面坐在て軍將御機嫌限りなく早打立との御諚あり二百余騎に騎馬打せさゞめき渡つて御下向あり宮城郡鹽の館には殿造營被成ける棟に宗門に屋形を立並べ國司を移し奉る奧州方の一黨は日番當番滯りもなく日夜の出仕被成ける去ればにや將軍は諸大名は別して

制し玉ひ大名小名和合して地頭も惠在れバ百姓ハ地頭を敬ひ奉りゑやもハ夷に心有れハ夷ハ之やもに相馴て乱れ切たる出羽奥州夷松前の果迄も弓矢ハ袋に納りて壹人國を治るとハ此若君のとゝ云之其後國土ハ静にて一年二年も早過て三年に成りにければ將軍霞の源太を召さつゝ如何に森隅三ヶ年の武將を禁りて下るゝ三ヶ年も恙無く勤めてけゝ東より都への土産もの何か相應の物有間敷かと御諚之森隅ハ畏り御諚の趣き諸大名へ相述けれハ大名小名畏り仰せの如く黒川郡七ッ森と云それハ音に聞ゆる高山にて峯深き山なれハ御狩を遊ハして然るべし數多の毛物の其内に熊の出ぬと有間敷彼の熊の皮こそハ都への献上可然と云なく將軍御機嫌殘からず早打立との御諚之畏りて人々ハ近郡へ一々次第を觸渡せハ百姓共國司の御狩なり迚我もくと七ッ森へと詰にける中に取ても苅田柴田に伊具亘理名取國分宮城に牡鹿岩井大崎近郡の諸大名御近所たり迚鷹をゆるされ玉ひける天にハ鷹の鈴の音中にハ駒の轡の音さゞめき渡て七ッ森へと詰にける彼所にハ馬の立所も無りける斯て御狩も始まりけり其頃の時代ハ鐵炮と云物未だ此國へ渡らぬ先のことなれハ弓にて射留る者もあり又ハ組留指通し分捕高名夥多敷見えにける既に其日も暮ければ明る二日目の御狩ハ三四ノ森とつぶしける斯る所に不思儀やな南の方より大樹を鳴し小木を蹴倒し翔來るハ何なるらんと見て有ハ七尺余りの猿一疋虛空を掠ふて來りける照井太郎

是を見て望む所の猿なるかと押寄てむつと組上を下へと爭ひける年ふる猿のことなれハ甚かしこく照井も組伏んとする所にて互ひに秘術を爭ひける照井も聞ゆる兵者にて押返しく猿も半分毛をむしられ照井も半死半生にぞ成にける霞の源太是を見て適れ危きことゝ走り懸りて指通しける夫より勢子共を呼寄て將軍の御陣へ擔かせける將軍御悦喜限りなく誠に猿の古きハひゝと云物之能献上に然るべしと山立に云附頓て皮を剥せたり既に其日も暮けれハ明る三日目ハ七ッ森の大森を狩立ける斯る所に北の方より大木をならし小樹を蹴倒し駈來るハ如何成物と見て有ハ壹丈計りの熊駈來る処に又鳥海ノ源八と云者管鎗遣ひの名人之逆手に持て熊の月の輪を目懸只一突と突ければ熊ハ手を負大に怒つて源八か持たる鎗をかなぐり捨源八をさんくに搔摑み手負熊と成にけり數多の勢子足輕を脳して夥多敷見えにけり霞の源太是を見て隔されてハ叶ハしと透を伺ひ太刀を取今や遅しと待懸たり案に違ハず彼熊ハ源太を目懸只一挙と寄所を源太ハはられて叶ハしと透を伺ひ熊に飛りと打跨がり鎧通しとするりと拔熊の脊骨にくつと突立尻尾をえつかと握り請鍔も通れと突通を壹丈熊のことなれハ其方此方の峯に駈上り此方の澤邊に駈來り虛空無障に駈廻るなれ共森隅ハ都一の馬の上手のことなれハ悪所離所の嫌ひなく処をせんとゝ乘たりけり一丈熊のことなれ共馬上の上手に責立られ兎有る木の根に胸を當大聲上てぞ死たりけ

り頓て森隅止目を刺し如何に勢子共是を將軍の御陣へ擲け畏りし迚勢子足輕大勢立寄り如何に方々熊と云物ハ死たる眞似をして多くの人を脳ると聞麁忽に寄まへ合點せよと罵ひ〱に立寄ハ折節北風烈しうして熊の稻毛そふに立勢子共是を見るよりも夫熊ハ死ぬぞと跡をも見ずして迯にける源太是を見るよりも扨臆病な奴原かな死たる熊が恐敷や早疾將軍の御前ふ擲けと云ければ勢子共ハおかなく〱に寄集り大勢にてからくり頓て御前に持にける將軍御機嫌限りなく登丈熊とハ是成りと宣ひて都への能献上と山立にヤ付頓て皮を剝せたり其後御狩終れバ此度忠節の人々へ御賞被下ける高きハ諸領賤ハ御褒美給ハりける爰に又宮城郡七郎ハ家老に五郎と云者あり八足切の猪を勢子共に擲かせ將軍の御前に出恐れ多くハへ共此猪ハ某ヵ組留てハと品々高名を申上ぐ霞源太是を見てヤア如何に五郎又者の分として御前近ふ立寄ハ推參えそこを退き玉へと呵りける五郎大に氣色を損じ然らハ又者高名ハ高名に成ぬかと申ける森隅聞て已れ誠に高名あらバ隨分取次申可其猪ハ我向ふの澤にて組留たる猪あるそ五郎聞て證據ハ何處にハそ森隅聞て已れか指成る賤敷者ヵ翌日に出さんと思ひハこそ其猪の前齒を貳枚つゝ打折置し夫勢子共改めよと有ければ畏て猪の向齒を見れバ二枚つゝ無りける森隅ハ懐中より齒を取出し向齒に植て見れハ割符を合する如くに五郎大に赤面し迯んとするを森隅透さず押へて扨々已れハ徒ら者

諸軍陣中あらハ主從共に屹度死罪に行ふべき者なれ共是ハ目出度御狩の事なれハ汝ヵ主人七郎ハ子細なく五郎ハ氣仙の大島へ流せと有り五郎をハ御前よて高手小手に禁めて其鼻をそき頓て罪科と成にける五郎が後ろ姿淺間敷かりける次第之其後御狩のこと終れハ七ッ森を立せ玉ひ大名小名御供にて宮城郡澤音と云所よ陽陣をすへ平地に大釜を七ッそへ此度取れたる猪を煮て諸大名へ御盃盞を被下ける人々こハ有難しと頻りに頂戴仕る是ハ扨當其頃奥州宮城郡に九門彌長者と申て渠か水仕よ惡玉と云女有り其日は澤音の邊に根芹を摘に參りける彼惡玉ハ元ハ由有者の子にてハか賤敷者の目にハ類ゐ稀なる惡女とてそハ見にける田村將軍公の御目よハ如何ある內裏上臈も是にハ及バぬ風情に見ゑける將軍ハ幕の內より御覽して如何に森隅向ふの澤邊よ眉目能女ヵ根芹を摘て居たるゝ是へ召寄せ酌を取せよと御諚之森隅畏り澤邊を指て下りけり爰や彼所を見て有るに一人も無りける能〱尋見て有れバ此方の澤よ稀なる惡女根芹を摘て居たりける森隅見て已れハ與の女成とか云ければ惡玉は畏り自己は此山陰の長者が水仕にてハか主人の奉公隙あふて髮に櫛の齒入されバおとろを乱すヵ如くゝ手足の爪たに取されバ鷹鷲の如くに去ならら魔緣變化の物にはハはず驚き玉ふな殿入と馴々敷ぞ申ける森隅聞て夫ハ兎も有れ角も有きあなたの御諚之早疾あきよ歩めとあれバ惡玉ハ承り自ら如きの賤女ヵ將軍の仰せ共畏へずハ

去ながら兎角仰せに随ひ了さんと森隅に打運てゆきは前に畏る将軍は機嫌限りなく誠に眉目能女ぞと悪玉に酌を取せは酒宴は花も降かと見えにける其後悪玉を澤音よ三日三夜催れては酒宴こそは成されける其後は酒宴のは嘉きも過ぬれは諸大名には暇下され悪玉には深く御名残を惜まれて黄金三拾枚美濃の上品三拾疋悪玉に下されける悪玉はこは有難し去ながら自分如きの賤の女か箇様の寶を何かせん外に形見を給はれと将軍不便に思召し母上より給はりたる神通の鏑矢を片手に取出し錦の袋に包ませ玉ひ悪玉に下されける悪玉はなは有難し将軍公の御形見是迄なりと押戴き早は暇を賜はりて名残おしけよ悪玉は九門彌か館へなそれは帰りける其後将軍は既の館へは帰陣有て早や其年も暮行て明る三月中半頃に成よければ都登りと聞えたり出羽奥州の諸大名はは供仕り白川二所の關迄は門送りなし奉つれは将軍御悦喜限りなく都を指て登らるゝ斯て帝都よは着あれば直ちに内裏へ参内あり奥州の事共を残らず奏問致成ける猿の皮と熊の皮を奉る龍顔甚た麗しく乱れ切たる出羽奥州を三年ヶ内よ取行ひ目出度上洛致すと寄特の至りと仰せられ日本の将軍に任せられこは有難しと将軍は急き退出仕る二條に入せ玉ひつゝ三日三夜のは祝儀は目出度かりける次第なり是は扨置き爰に哀れを止めしは奥州の九門彌長者か水仕悪玉にて諸事の哀れを止めたり奉公の身の悲しさは昼夜の隙もあらされは余りのとの悲しさよ将

軍公より玉はりし鏑矢を手に持てあなたの方と此方の空を打詠め戀し懐かし将軍公此山陰に坐在か扨てあの雲の下にあはすかと明暮戀させ玉へしが今は悪玉懐胎と成にける斯て月日を經る程に月日に關守をはらねは早三年になりにける九円彌は女房を近付け扨又あの悪玉は懐胎に見えけるが悪玉箇様なる女に契る者か有へきが女房は此由を承りのに如何に妾が殿女は賤しき者よしへは九十九向に八百八好と縦のは得は悪玉が様なる女にも相應の相手か有へきなり九円彌聞て夫は兎も有り角も有り惣して人の臨月は心經の文字の數二百七十四箇日よ究りたり悪玉は懐胎に成てより以來三年に及べ共産の紐を解ぬなり是がにしきよぞ實に忘れたり日外澤音へ根芹摘に参りし時二三日歸らぬと覺へたり去それは狐狼猿毫の業なるが又は山男の手に懸りて有へきぞや中々人間は生れまじ屋形の内にて産の紐を解するとは穢られし早や追出せと計りにて坂田より十八丁計り何方なる蘆野の中へ産家を立て悪玉計り追出す無慘なるかな悪玉は蘆野の産屋に入にけり竹の編戸や菅拭に居なから月を詠めんいと丶思ひは陸奥の栗栖山の物あんじ積る思ひは猶は重き次第に月も重なれば三年三月と了はは産の紐を解く頃や今ぞ限りと悩る丶なれ共正八幡の守らせ給ふとなれは安々とは産の紐を解き給ふ清水にて生出湯を参らする御子を取あけ見給へは玉の様なる若君之悪玉斜めに悦びて下着の衣に包みて能々労はり奉り乳味を

含め今ハ早見るに付ても悪玉ハ説口とこそ哀れあり扨も〳〵果報少なき者ぞかし其方の父上と申ハ将軍公にて都人の胎内を借せ給ふならバ若君誕生ましまさ迚数多のお乳や乳母を附添て蝶よ花よと為すへきに夫よ引替へ淺ましや賤き妾が胎内を借せ給ふゆへ蘆野の中のお誕生あら情なの憂世やと暫し涙に咽かへる斯る所へ九門彌か館より使者の参り如何に悪玉汝が安産せしと聞く其子ハ惜む物ならず早疾捨て屋形に帰り奉公せよと有りけれハ夫ハ無慘なりと悪玉ハ口説とゑそ哀きなり夫れ世の中に仕ましき物ハ身賀奉公そや扨も世にある人々ハ廿日一重と申迄産家の内よ有ると聞く夫に引替へ自らハ未だ七夜も立さるに屋形に帰り奉公せよといふハ何事そあら邪見の九門彌と暫し悔ませ給へ共主人のとなれハ力なく泣く去ハ迚捨て帰らんと悪玉ハ蘆野の中を迷ひつゝ爰に此若捨へきや彼所へ若を置くならハ狐狼野干にほくせられん共所にも置れず彼所よも捨られじと蘆野の中を涙と共よ迷へるに早日も西山に傾きいつも名残ハ同しと左あれハ捨て帰らんと小松の元に立寄て上着の衣を敷皮となし口説とこそ哀れなり如何にくゝりんせ無き共聞てたべ此母ハ能々守育てたくハ思へ共主人の仰せ是非もなしと暫し泪に暮居しが斯てハ果じと心を勵まし迚も角ても專方なし此に捨て帰らんと能人に拾はれて育ならバ末ハ目出たかるべきよ如何なる人の手よ渡りとふして育のそたゝぬやら二度と逢ふやら會ぬやら親子の

縁たに尽ぬなら何國が浦よ育つ共又逢ふともあるならん名残惜や此若を泣々彼所に捨置て立帰らんとし給ふに勞ハしや若君ハ乳房の別れを悲みてひつと泣出す哀れさよ乳房を尋ぬる悲しやと又立帰り抱き揚け若に乳房を含らせたり親子の別れ惜まれど叶ぬとなれは是迄なりと思ひ切り彼所に若を寐せ置て立帰らんとせ給ふに南の方より紫雲たなびき忽ちに聲高く如何に悪玉其子を捨る者ならず夫れを捨る者ならて汝が為よ悪かりなん能に育つる物ならは末は目出度かるべきに我てそは肌の守の觀世音と光を放ちて飛び給ふ悪玉はては有難く主命は背く共天命は背きかたしと有り去れハ浮告に任せんと悦びて若を抱きつゝ元の産屋に立帰り蝶よ花よと寵愛をせ是れハ扨置き九門彌夫婦ハ塩釜の淵崎よ立せ給ふ觀世音ハ靈驗あらたにましませハ是れへ参詣致すと夫婦打つれ参詣も最早下向と成しかハ長者申様如何に我妻聞給へ女ハ高きも賤しきも皆同じ之縦令賤き女にても貴人に仕ゆる共時ハ玉の輿にも乗るとなま是れより悪玉か産屋に参り情を懸んと申けれバ九門彌聞て穢らはしく候得共汝情を懸るなら我も立寄申さんと産屋り原へと廻らるゝ彼所よ至れハ柴の庵の編戸を叩き如何よ悪玉九門彌か來るそや爰を開けよと仰せけり悪玉ハ承り戸扇を開きてこれハ浮主人様にて候か狐狼野干山男なとを出して斯の如き子が出來て候と指出す九門彌ハ驚き能若を設けたりいさ此方へと膝の上に抱き上けをくれの髪を撫

さすり女房此を見るよりもあら恨めしや妾の殿あなたは十八自らは十四の年よりも妹脊と成て早や四十年過れ共未た世繼の子はあらぬ如何なる先の世の報ひか自らも此樣なる者をば設けてあるならは數多の寶もいらぬにあら恨めしの我身やと暫し泪に咽ばる〻長者是を聞よりも實に道理なり如何に惡玉は身始終を知る如く我は世繼も持ぬなり其子を我に給れよと惡玉は承り是は愚かの仰せかな自ら如きの持し子を御代繼には叶ふまじ長者は聞て否々夫は左にあらず少しも苦しからず隨分此の九円彌が家督にそるとも差支へなし是非に呉よとありければ惡玉は今は主人の仰せに背かれず仰せに隨ひ指上んと云ひければ九円彌悅び其儀なら今日より奉公を一生免そ〻屋舖の內ちに小家を立て一生あんらくに暮らさせん今日より以後は必らそ親と名乘すさんと鹽釜明神の大誓文を立よとあり惡玉は承り是きは愚かと思へ共主命なれば力なく委細は承知仕り九円彌左あらは人の見ぬ內に片時も早く歸宅致さんと若君をば惡玉に抱かせて是れも觀世音の御引合と悅び勇んで我家を指てそ歸りける

○惡玉御前の記

扨も其後九円彌は我家ゑ歸りければ約束の如く俄に邸內ゑ小家を立て惡玉か奉公一生ゆるし金銀米穀を過分にこそは與へて小家に住居を致させける若君は九円彌が大切の代繼なればとて一門一家を寄集め吉日を撰み立元惡玉は熊野より出ける物なれば熊野の熊を片取て勢熊と名付ける一年二年早や過て七才となりければ學文の爲に宮城郡に名も高き龍門山道雲寺にそ登らせけるさしも君高き九円彌か代繼のとなれは供人數多引具して御寺に至れは住僧の御弟子となり能〻學文怠らず十四歲になり給ふ頃しも今は八月十五日宮城郡の八幡村八幡宮の御祭禮にやぶさめ弓太郎は先年より山の寺の兒子たりしが撰出していへば此度も山の寺より出そ〻其日に當りて道雲寺今日の弓太郎は離れあて勢熊こそ弓の上手にいへは勢熊ならでは叶ふまじ八幡ゑ參り目出度弓太郎を仕れ勢熊は畏つて御請し流名長者の代繼裝束い人々勝そ一層目立て花やかに兒子共を引具して八幡の宮へと參らる〻社內に至れは水垢離すかき淨身を淸め給ひて神前を拜しける惣て別當に對面有りて互ひに式對一禮終り其後別當申ける樣は今日の弓太郎は何方にていぞ姓名を名乘れよ兒子共答へて今日の弓太郎は恐けなくも山の寺の學頭九円彌か代繼勢熊殿とそ申ける別當大に腹を立ち何勢熊か弓太郎に來るとや九円彌か實の子そなた輕き者を指てや勢熊は九円彌か子あて子に非ず水仕女の惡玉か子なるそや左樣の賤敷者を此庭の弓太郎とは穢らはしや早速爰を立除よ跡消めよと以ての外に呵りける勢熊は數人の中にて別當に恥辱を與へられ憎き別當かな已れ只一擊に打割て兎ても角てもなるへきと思へ共いや待て暫し我心短氣は損

の甚ひなりと心て心を取直し唐土の韓信ハ市人の股をくゞり漢の高祖ニ仕へて四百余州の臣下となり去るニ依て韓信ヵ傳へ置れし事共を思ひ出し市人の股をくゞりて末にハ千人の肩を越ゆと承ハれバ勢熊も此所にて恥辱を取共終にハ千人の肩を越へて與んと心を靜めけれ共數多の人に後ろゆび指れんとハ無念さと思つて九門彌か館へと歸らるゝてきれハ扨盜き悪玉ハ其日ハ八月十五日名月のヿなれバ月を詠めて終夜一人言して口說つゝ夫れ世の中に奉公の身程憂き物ハなし自ハ氏も系圖も九門彌杯ニハ劣まれせし抑も自からの先祖と申そるハ熊野の權現天竺ハ摩迦陀國より日本へ渡らせ給ふ時御供申せし近江中將安形ヵ拾七代の後胤に近江判官安形ヵ三の姫ニて候か先年丹後へ參詣の時盜賊共ニ行き逢て供の者共皆討れ甲斐なくも自らハ盜賊共に奪ハれ元より美女のヿなれバ爰ニて遊女ニせん彼所ニてハ賤き者の妻にせんと言れし敵肌の守の觀世音ニ深く祈誓を凝すれバ有難や類ひ稀れなる悪女とあり今ハ此陸奥ニ迷ひて九門彌か水仕ニて候が先年都の將軍公當國へ下らせ給ひし時將軍公の御目ニ叶ひ御盃を頂戴仕り剰さへ神通の鏑矢片手片身と給はりしが彼の鏑矢の德ニより勢熊を設けしかとも是を九門彌ニ育て上られ親と云ひ子と名乘なと鹽釜明神の大誓文を立させられ親子の執心切れ放れ附けハ誠や我勢熊ハ今日ハ八幡の弓太郎と聞て有り若き者ニてハ得バ的を射損じなバ賤しき悪玉が子なるぞと後

ろ指をさゝれん是れ我身の上の恥辱ニ最早今日のやぶさめ刻限も過ぎつる頃で有りつらん態し深しの我子やと暫し歎せ給ひける是を勢熊ハ小家の邊に立寄て一々此事を聞取られ戶羽をほと〱と音つれて爰を賴むと云けれバ悪玉答へて誰やと問ければいや若き候ハ勢熊に候ぞ爰を明給へと云ひければ悪玉ハ驚き戶羽を開きこハ如何に若君ニて候いざ先づ是れへ此方へと座敷へ請じ入れければ勢熊ハ悪玉の前ニ手を付て如何に母上樣某しが父上ハ何國にか候ぞ姓名仰せ聞られよと乞ひければ悪玉ハ承りこハ若君ニハ物に狂ハせ給ふヵや但しハ狂氣し玉ふか九門彌樣御二方か若君の父母にて候へハ自ら如きを母上杯とハ恐れあり若君ハ附召し如何ニ母上深く包せ給ふなよ某しも八幡の別當ニ恥辱を受けたり其由ハ勢熊ハ九門彌ヶ子にて子ニあらず水仕女悪玉が子なるぞよ左樣な賤しき者を此庭の弓太郎とハ穢らハしや疾く庭を立退よと別當ニ恥辱を與へられて候ゝ去るに依て別當か眉間を只一打ニ討割て兎にも角にもあすべきと思ひしヶ何れニもせよ母上に承ハらんと只今是迄參りしか母上樣ニハ御先祖の御事から一々口說せ給ふにより委細ハ承知仕る深く包せ給ふなよ母上樣と申上く悪玉ハ至當の道理ニ詰られて今は名乘らんかと思ひしがいやまて暫し鹽釜の大誓文を立てたれハ何と若君ハ宣ふ共九門彌御二方こそ若君の父母ニとて中々名乘る氣色ハ無りける若君今ハ力なくよし〱去ば是より八幡へ急

り別當が眉間を只一撃の下に打割らん後にそ恨み給ふなと駈出さんとする所を惡玉追駈け引止め如何に勢熊左程に思ひ切たるとあらハ委細を名乗り申へしは身か父上と申そは都將軍にて先年奥州國司に下らせ玉ひし時將軍公の御目に叶ひ御盃盞を頂戴し神通の鏑矢を賜はりて候其德によりて汝を設け候と一々次第を物語れハ勢熊は悦びて偖は左様に候か其儀ならば父上より賜はりたる神通の形見の矢を出されよ惡玉は心得候と神通の矢を取出し如何に勢熊父の形見は是なりと指示せは若君は悦びて押戴き是さへあれは都へ登り父將軍へ對面し母上へも玉の輿を願て下し申さん御暇申さん母上と直に小家を立出けれは惡玉は悦びて如何に勢熊よ都にて父に對面致しなハ音信を早く知せてたべ迎ひの輿を待居るぞ更は〳〵と互ひに暇を告け別れ田村の里を既に出んと思ひしに鹽竈の明神は奥州一の宮に坐在は社參せんと思ひ出し鹽竈を指て行く程に千賀の浦に至りけれハ潮を以て身を清め坂を登り神前に膝をつきぬ抑も此神と申奉るハ内宮は地神の御神兩別宮は人皇十四代仲哀天皇第二の宮少しく子細あつて陸奥へ下り給ひ花節の里と云ふ所へ御出有りて夫より千賀の浦へ飛移らせ給ひて雨またらの牛をひき始め給ひつゝ七ッの釜を鑄させ給ひもたらせし御鹽を柏の葉に押包み兩またらの牛に附けさせ日本國中へふり渡せ是れ鹽竈の明神と去るに依て此明神をは鹽留の太子共鹽筒王の尊とも又た猿田彦の系を繼せ給

へは猿田彦共拜むなり道祖神の血脉なれは道祖神共拜む又右宮左宮別宮と三社又東宮南宮覚たいき是を合せて鹽竈六社の大明神と號し人間五常の御神ゝ去れは勢熊は神前に額つき都に在坐父將軍に逢ふ樣に導かせ給へと一心不乱に祈りて御坂を下向被成奏社の宮を伏拜み立出て見れは恥辱を取り八幡山稲の笹原風越て興正山の鐘の音哥にハ讀ど末の松山浪小佐次立ち石伏し石千引石撫干に見えぬ沖の井の野田の玉川をき出て流れを明す玉川や一夜は誰や留貝の大野朝臣惠美朝勝の立置きたる坪の碑を弓手に見て市川渡れは千鳥立つ南宮明神此神は此花咲や姫豊玉姫の跡を垂させ給へつゝ色の御前の御社守らせ給へと伏拜み其方の方は先年父將軍の御所を立させ給へし勝の講とれあれとかや見るに付ても懐かしや牛頭天皇の御社守らせ給へと伏拜み奥州の奥の細道獣鷲を打渡り元の松山東光寺十二の藥師は慈覺大師の御建立十符の菅菰切彌ヶ淵疑川を打渡り玉田横野を馬手に見て露ふき里は是とりや本原の宿早過て此宮城野に咲萩は露に乱れて野に錦梅ヶ岡は是とかや白山天王十八の尼寺は聖德太子の御建立木の下藥師を伏拜み廣瀨川をも打越て見上て通る茂ヶ崎や名取川をも越給へ熊野は三社大權現名取老女の御建立守らせ給へと伏拜み那知の御山を馬手に見て今熊野權現を伏拜み鹽はさゝねど鹽手山長の旅路のとなれと雨は降ねど笠島や道祖神を伏拜み早阿武隈川を弓手に見て鐙摺石蹄坂伊達の大木戸早過て信

夫の里に若給ひて一首を詠み置れたり

歸りみん何時しか爰に丸山や信夫もちずる知人そあれ

次を何國と問せ給へハ若宮貳本松竹矢吹爰田の關を越へ太田川や小田川や身の行末ハ何となるらん白川の二ヶ所の關をも越給へ境の明神を伏拜みあくつ網川坂東太郎戸根川や此武藏野に感りけれハ指もふ廣き原なれハ月の入べき山もなし相摸川をも越給ひて藤澤に着にける大磯小磯早過て湯元の地藏を伏拜み彼浦島か明て口惜き箱根山戀し床しの父將軍を夢ふ三島の神社流れ激しき藤川や只何事も油井蒲原の宿を過ぎ忠義の旅も駿河なるあれ三保か崎〳〵月見かた富士の雪消なん跡の恥かしさあれが春の明ぼのと今一入のは慰み蹴上て通る鞠子宿松にのらまる藤枝や四方ふ海ハ無けれ共嶋田の娘きつれさす雲井流るゝ大井川神よ祈るれ金谷の宿小夜の中山滑源寺無間の鏡かあるとかや此鏡を聞に付ても恐敷や人に情けハ掛川や大天龍小天龍遊り爰ふ遠江さゝふんさ謡ふ濱松の濱名の明神伏拜み實のならハ花咲なんぐん瀬川荒し小嵐醒めかいや猿ヶ番場を早過て長の旅路のとなれは鏡の宿も恥かしや裙に玉ちる篠原や瀬田の唐橋打渡り近江八景多けれど中に取ても石山や大津三井寺志賀唐崎の一ッ松宿の名殘や名所の名殘數重なれハ漸々と今ハ五條の市街ふみそれ着にけり其後若君ハ世の風聞を伺ふふ父將軍公二條堀川ふ御所

を立させ給ふ由に承る何卒父の御緣を求めんと毎日〳〵堀川の御所へと通れるゝ折節將軍の屋形にては外樣の侍士寄集め蹴鞠の會とそ聞えたりとふ〳〵はりやはりやとふはりと蹴る鞠も將軍公の蹴させ給ふ御鞠はいつしくそれてやらひを出て築地を乘越へ塀を越へ門の外へと出ゝける若君此樣を御覽して小蹄く鞠を蹴返し給へば門を乘越へ築地を飛ひやらひの内へと入ゝける將軍是を御覽して偖もふしきや此鞠はそれて行べき筈はなしそれたる鞠は又叟へ二度戻るは不れあし急き門外を見て參れと霞野源太へ仰せける森隅は畏り候と御前を頓て罷出て門外へ出て見るに此方の方に旅勞れふ窶れたる冠者か一人四方を詠めて居たるふぞ森隅是れを見て如何ふ旅の冠者國は何國て候そ若君は聞召し參候奥州者と答へたり森隅聞て奥州者にて候はゝ伊勢參宮ふて候か又は都見物に來る者か若君は聞召し參宮ふても候はそ都見物にても候はす本公の望みにて是迄參り候恐れあゝら將軍公へ申上て給くれゝしと森隅心得候と急き御前へ出て右の次第を申上く將軍此由を聞召し奥州者と聞からは懷ゝしや此方へ召とは諚ゝ森隅は畏り又門外へ走出て若是を伴ひて將軍の御前へ出つれは將軍公御覽して是れ如何ゑ陸奥の冠者汝は奥州と聞けるが奥州は何國の邊と仰せける參候鹽釜の邊と答へける將軍御覽して扨又本公望みとて遙々是迄來るとや出羽奥州關八州は諸大名も多かるへきふ何として夫ふ仕へす是迄來るそや若君聞

召し參候出羽奥州關八州大小名は多けれと某しか仕ふへき主人は壹人として候はす恐れながらも主人壹人給へ壹人と申あく又將軍御覽して其儀隨分承知せり其儀なら召仕つても遣さん給人にもさま〳〵の得手かあり汝ちは武藝は得手なるか若君は聞召し參候東より本公か望とて是迄參る某の一方斗て候はす第一武藝ゑ於ては荒馬ゑ乘て強弓を引き第二文學は孔子の教へ給ふ書籍なら何れ成り共講釋仕て候之第三遊藝と申ては哥を詠じ詩を作り連歌徘偕碁双六鞠の會何れ成共究めて候之將軍此由を聞召し扨も汝は武藝學文遊藝とも殘らず學ひて有けるな抑も侍士と申ものは剛氣計りて叶はぬ之少しく柔さも無ては叶はねは佛書は心得て居るか若君は聞召し參候某しも山の寺にて學文仕候えは一切經も兩度引出して候之其儀なら力の程はと仰せける若君は聞召し參候力は未だ試し申さぬ之夫に試させ見よとの御諚之三人持の碁盤ゑ白糸緘しの鎧二輛重ねて打乘せて是を以て奥の冠者を試せと有りけゝは若君完爾と打笑ひ都人とて優しさよ出羽奥州と申は夷之その惠比須の住家にて候へは箇樣の物は四ッ五ッの童子か朝夕手遊ふ仕る箇樣の物は些し手輕ふ候そ將軍憎しと思召し如何に森隅汝ち其鎧を着し碁盤の上に跨かりて持れて見よと有りけれは畏りて森隅は白糸緘しの大鎧二輛を重ねてさつくと着て白柄の長刀杖に突き碁盤の上にずつくと立ちヤア如何に奥の冠者ちと慮外ながら將軍よりの御諚之試して見よこ

云ひけれハ若君ハ聞召し若し左樣ふてもひハヽ冠者か手頃ふてひハんとじつと寄り碁盤の両隅えつかと取り廣椽通りをひらくと馳廻り元の所に立歸り若君思ふ樣碁盤の上に立たる男子憎さも憎し恥を掻せて呉んと思召し如何に都の殿よ某し旅の労れ故若し持損しるともありつらん必ず御油断成されまじと云ふより早く碁盤を逆さふ投ふけり森隅ハ氣早き男子にて翻りと刎返り碁盤の裏ふ立ふりけり將軍始め一座の人々是を見て持も持たる奥の冠者立も立たる森隅と暫し鳴りハ靜らそ將軍ハ倩々御覽して扨又汝ハ世の常ならず武藝學文佛習遊藝力量迄人よ勝れて見へけるり汝程の兵者か貧しき君に仕れてハ嘸や無念ふ思ふらん近習に仕へ得さそべしと御近習廻りに仰せらる互ひふ親子と知りなから將軍の御身持又ハ若君の御慎みにて奉公大切ふ勤めける親子の縁の厚き故將軍公の御氣に叶ひ半年計り相勤むるも胸の思ひを隠されて空しく月日を送りける或時若君御前ふ罷出て如何ふ我君樣某しふは御暇下されたしと申あく將軍是を聞召し偖又汝ち奉公を望みよて登りたるふあらずや然るを今に至り暇の願ひ不審なりと宣まへハ若君ハ參ひ某ハ東へ母を壹人殘置きてひゝ某し都へ相登り給人に取付し物やら取付ぬ物やらと嘸や案じ暮し給ふらん一先奥州へ罷り下り母に此事を物語りて悦ばせ其後よ又も都へ相登り御奉公仕らんと申あく將軍此由を聞召れ誠に汝ハ親孝行忠義の者なるぞ其儀なら暇を取せ申ん併よ

對面して后に重ねて奉公を仕る畏りひそ御前を罷立ち我も半年計り都に有りなから都を一見仕らそ東へ下り土産の咄し更よあし今より都を一見せんと森隅に打向ひ某ハ都一見に參るゝ明日歸り申さんと其日の午の刻に出て一條より二條登る丁ふ下る丁祇園清水加茂春日男山ふハ叡山鞍馬洛中洛外殘りなく一見して明る日の申の下刻よ屋形に歸りて森隅ふ箇樣くと語りける森隅大ふ驚ろき將軍へ右の次第を箇樣くと申あく將軍公聞召し何國の邊を見たるそや參ひ尋常の者ハ五日十日ふも思ひ寄さる所をハ一夜一日ふ見て參るとハ中々凡夫の業ならず出羽奥州と申ハ実地近きとなれハ剛氣我慢の者か將軍公の武勇を押へんか爲に斯樣の者か來るかも知れず君御思案在て早く此冠者を討給へ將軍ハ聞召し其冠者を討たんと思ひなハ數多の人を損すへし其儀なら鬼鹿毛の餌食ふせんより外ハひまじ是れ如何に奥の冠者よ汝ハ荒馬に乘て見せひへ一馬場所望と仰せゝ若君承り委細承知仕り如何ふ森隅御馬屋へ案内を願ふなり森隅心得ひと御馬屋を指て伴ひたり鬼鹿毛馬屋と申すハ七八間ゟ其内ハ楠の大木を以て大盤石に堅め天井にハ大石古樹を山と積み鎖を以て四方へ繋ぎ置れたり森隅ハ大戸の門ぬきを押開き荒馬ハ是也と若君を馬屋の中に押入て屋形にこそハ歸りける若君ハ馬屋の躰を見て有れハ常に死罪の者を喰すと見得て四方の角にハ死骸山を爲し鬼鹿毛ハ若君を見て常に給はる罪人と心得て眼を瞋らし前り

き打て飛懸らんとする所を若君ハ少も騒かず塵を拂つて御身を清め如何に鬼鹿毛汝生ある物ならは我云ふことを慎と聞け馬ハ馬頭觀世音の深く惜ませ給ふ牛は大日如來の惜ませ給ふ夫れ天竺釋羅僧國の猿田皇父母敬養の其爲に山に行く然るに虎は餌に飢て玉を喰はんと立寄れは大王や御覧し如何に虎我に片時の暇を取せよ我父母に食を與へ其後汝に喰はれん佛提信道成佛と唱へ玉へは虎ハ即坐に成佛致すゝ汝我に隨ふ物ならハ富士の裾野に七塔加羅に光堂を建立し馬頭觀世音と祝ひ立て呉ん如何に〳〵と詰寄り給へハ流石の鬼鹿毛一重の膝を八重に折り首を領垂れ耳をたれ涙を流し居たりしハ物を云さる計りゝ若君ハ大に悦び出雲樹の白磨き引手あふみの深かりしを馬にかんじてくませつゝ金覆輪の鞍置て小簾紋の手綱をハ一よりよつて馬の前輪にさつと懸け大戸を開て引出を常に馬屋を出しとなけれハかん強くして嘶なく聲恰も雷の如くゝ町内の人々ハ是を聞若も其若君鬼鹿毛を乗損したる時ハ押る人ハ四方にあらじ在それは此町内へ駈け來るは必定あり然る時には町内の人種尽果ん如何にせんと騒き立生たる心地ハ無りけり去れハにや將軍公西八條櫻の馬場へ矢倉を高く揚けさせて鬼鹿毛の貴馬を御覧有り若君ハ鬼鹿毛を櫻か馬場へと引出そ既に乗んと仕給ひしか否まて斯程の此名馬を一度擧めて乗んづと扨々天晴れの御馬ゝ鹿合骨の四つ目節大唐竹を根引にし碁盤に依り立たる如く適れ名馬にいとそ

いろに御擧め遊ハされ無禮御免と馬引寄せゆらりと乗り先つ一番に地道を乗り二番よとゝろ三番に駈を乗り鐙隠れに戻り詰め二三度四五度乗たりける霞野源太是を見て適れ上手の乗様かな其儀なら碁盤を乗廻し白樫の八人持の碁盤を櫻ヶ馬場へと運ひける碁盤乗りハ若君心元なく思へ共乗れんと云ふハ卑怯ゝ少ハ心得いと馬を碁盤に乗上たり先壹番にハ地道二番にといろ三番にハ三百六拾一の目を一々殘さす乗たりける森隅見て都て曲馬と云ふ物ハ楷子を乗り第一ゝ是を乗れとそ申ける若君委細承知と名馬件の楷子を首尾よふ參れと云ふ儘に強馬には強く手綱をうゐくり捨鞭打て駈出そ元より名馬のとなきハ十二の楷子をくるり〳〵と乗上たり其方の築地此方の塀大塀小塀門も築地も飛越へ刎越へ跳り越へ馬か勇むと見ゐけるが御殿の上へ乗上けたり屋根を下りに逆落し箇様の悪所ハ長乗り無益と十二の楷子を乗下し急き馬より飛て下り蹲んて畏り扨々君ハ能き名馬を持せ給ふゝ些うんゞ過き口強にていゐ得共乗心能き御馬にいゐ去なりら名馬を持せ給へ共乗手壹人に馬壹頭にていと申あく將軍御機嫌限りなく誠に乗たる奥の冠者直に馬屋に引て行け畏りいと元の馬屋へ引入る鎖を以て堅く留め大戸に閂ぬきを確乎おろし畢形を指て歸らるゝ此若君の馬術ハ凡夫の業とハ見えさりける將軍公霞野源太を召しあの若を鬼鹿毛の餌食にせんと思ひしか即て馬か隨ふゝサア此上は我れ矢先に懸けんより外ハいゐれと鬼鹿

毛の貴馬大儀の褒美とて早や疾く膳部を取すべし急くと有けれハ畏て森岡ハ早速膳部を申付すア奥の冠者君より御料理給はりたり夫にて膳部を拝味被致よと有けれハ若君ハ疾くに悟らせ給へ共在あらぬ体にて誠に冥加に叶ひ有難き仕合とておめそ臆せす食するを将軍御覧し仕済したりと五人張に十五束切て放てハ過またそ若君の胸板にあひなく成て見えけるか若君ハ少しも騒かす食そる箸にて確かと挟み膳の角へと直し置く将軍驚き二の矢を番へ上られ首下られ矢坪と狙いを固めて放つ矢ハ若君の肝のたはねに危く成て見へけるか又も箸にて確かと請留め四方を急度見廻し某にてあらずんハ肝のたはねを貫ぬかれん扨も危きとと左有ぬ躰にて抑へたり凡夫業とは見えさりける将軍は今に始めぬとあれと大に驚かせ給ひ合の障子をさらりと明け如何にや奥の冠者御身ハ只人にてハよもあらじ汝ぢ鬼鹿毛の餌食にせんと思へ共却て鬼鹿毛を跨はし我又矢先に懸んとて一度ならず二の矢を番へて有けれと我の矢先にも懸りえず我か矢先に懸らぬ物は天か下には覚えおし迚ものとに奥の冠者姓名を明されよ若君は畏り随分名乗さんか将軍公の御家は何代傳はりいそ去れハ我先祖と申ハ星の中より出生有し五條中將年春我ハ又三國ヶ浦繁井か池龍差王と云へる大蛇の胎内に三年三月宿り出生致せし我身ハ則ち二代なりと仰せける若君聞召され其儀ならハ将軍の御家ハ三代續くと思召せ将軍公奥州へ國司に下らせ給ひし

特奥州の悪玉に御馴染の悪玉か胎内に御胤を宿し三年三月を經て出生致せしハ某之将軍公聞召し扨ハ我子にいか今迄ハ箇様のとハ知ずして鬼鹿毛の餌にせんと計つて其後ハ我矢先に懸んと一度ならず二度までも思ひしに神佛是を憐み給ひ今迄勝負の付さりしハ偏へに弓矢八幡の御引合せ親子の縁厚き故ならん夫世の中に将軍程の名将か我子の手前も面目なしと宣ふて兎も斯く将軍も悦喜泪に咽はること是ハ扨置外様の侍士共是を見て今迄ハ奥の冠者と思ひしか扨ハ君の御胤なるか道理ちや是迄の業ハ實にも遁れ難きやと敬ひ恐れて平伏す将軍ハ御覧して去ハ参内致さんと時の装束改めて直に内裏へ上らること御階近ふ畏り始終残らす奏問そ帝御簾巻揚させ将軍親子を叡覧あつて一代ならず二代三代相續き箇様の稀なる者出ると我日本山海の悪魔降伏の為ならん父にも増たる器量之其出生ハ奥州塩釜の邊田村の里と有るからハ早速元服致そべし田村将軍年人に任せられ猶怠らす天下の政道仕ろとの宣旨なり畏りいと將軍御親子ハ玉體を三度拝されて内裏を退出成され頓て二條の御所に被歸けれハ御約束の如く奥州悪玉御前の御方へ玉の輿を下しける悪玉御前ハ御悦ひ限り無く去ハ都へ登らんと玉の輿にそ召れ給へハ昨日迄も今日迄も世にも見憎き顔形ち御代に出させ給ふとて如何なる内裏上臈も是にハ如何て増るへき九門彌夫婦ハ大に悦ひ去ハ御供申さんと玉の御輿の左右に立ち浮世に随ふ習ひとて主が下人下人

ヶ主となりけれハ淵ヶ瀬となる世の習ひ悦び勇んて都を指て御供す頓て都に着けれハ二條の御所へと入給ふ悪玉御前ハ今日こそ父將軍と田村將軍に再度り廻會ひ給へハ暫し積る御物語り御悦ひハ限り無し其後九円彌夫婦を田村將軍の御前へ召れ如何に九円彌汝ハ我を育て呉し其恩ハ誠の親より重きぞや此上ハ奥州にて三萬丁永代に判を給はり又九円彌か女房にハ悪玉御前より肌の守の觀世音並びに辨才天を給はりける九円彌夫婦ハ有難し〳〵と早御暇を給はりて花の都を立出て遙々と陸奥の國を指て下らるゝに程なく奥州に成りけれハ肌の守の觀世音を直に石名坂の圓福寺へ奉納を依て圓福寺の本尊ハ悪玉の守り本尊正觀世音にて渡らせ給ふ之末世の衆生濟度あり並びに梅ヶ岡密祥院の辨才天ハ是れ九円彌の御建立にて靈験著るし其後悪玉御前の産家の跡を三尺土を取て流しける其裾野を赤沼と申てかりやすと申染草の出る所は此時よりの由來之扨又八幡の別當ハ科無きも若君に悪言したる罪として耳鼻をそいて江の嶋へぞ流されたり九円彌夫婦ハ奥州に於て三萬丁給ハり再度の花を咲せけり扨又田村將軍ハ悪玉御前の守り本尊十一面觀世音を直に都の清水に御堂建立ありて音羽山清水寺と額を上け今が世迄も清水寺の觀世音ハ田村將軍の御建立と世の人々知れり時に大同二年あり

○立烏帽子記

夫れ我朝ハ神國よして度々悪魔ハ粧化なそといへ共萬里の外に切拂ふ是神國の有難さ爰に都の音羽山清水寺を御建立坐在田村大明神並びに奥州野の嶽冨山牧山大竹四ヶ所の觀世音勢州鈴鹿大明神の由來を委敷尋ね奉るに人皇五十代桓武天皇と申奉る頃とかや天下の武將をハ田村將軍年人とて御年拾四歳にて天下の政道を執行ひ玉ふ之扨又御家の郎等にハ霞野忠太盛春とて文武兼備の勇士あり君内にハ五常を本として外にハ政道を正敷なし給ふ是れ聖明なる賢君とて仰ぬ者こそなかりける去共爰に一つの大變出來ぬ故を尋るに其頃勢州鈴鹿山よ天竺大六天の魔王朱島王の一人娘に立烏帽子と申鬼女三年以前に天下り奥州磐井郡達谷ヶ岩屋を住家となして大竹丸と云る鬼神と夫婦になり日本の人種を取尽さんと文を以て約し時節を待居間に世人の腰に付たる金銀も車に積たる粟穀も藏に貯へる寶物も皆露霜の朝日の當るか如く消失せけり近國の僧侶等は只事ならすと都へ注進そると櫛の齒を挽か如く之帝大に驚かせ給ひ早や疾く天文學者を召せとの宣旨之勅命よ隨ひ博士は内裏を指て上らるゝ帝よりの倫言にて箇樣〳〵の次第其吉凶を占ふへしと勅諚之儒者は宣旨を蒙むりて要集暦引合せ暫し考へ横手を打ちあら恐敷や大天朱島王の一人娘に立烏帽子と云へる女伊勢の鈴鹿山に住家をなし日本の人種を取尽し神國を魔國にせんと計る之急ぎ討手を指向られて然るべしと奏しける帝大に驚かせ給ひ公卿大臣を召

れ此儀如何せんと勅諚あり月卿雲客は評議にも及はそ田村將軍年人は代々變化退治の家なれハ是こそ宜しかるらん尤も武將にいえハ年人こそ然るへしと奏しける帝叡聞坐在て夫れ年人を召よの宣旨なり頓て使者を立給ふ將軍何事やらんと時の裝束を改めて參内成されける階近く畏り帝叡覽坐在て年人なるが珍らしや汝を召と別義にあらず此度伊勢の國鈴鹿山に鬼神天下り我日本に雜化なそ急き彼地に馳せ向ひ退治せよとの宣旨ハ去るに依て二萬余騎を下られは雁ハさつと下りける將軍ハ畏り二條へ歸らせ玉へける霞野忠太を召れ箇樣〳〵の次第に此上ハ只信心にしくハなし總て日本六十余州大小の神祇を祈らせ給ひ別て清水寺の正觀世音に深く御祈誓坐在くて都を急き御出馬あり伊勢の國鈴鹿山へと登られ林の下に陣屋を懸け笹原草むら石の廻りに至る迄廿日余り尋ねれど變化の住家ハ見えさりける將軍大に立腹有り是れは田村が智略を引見ん爲めに事なきに追討の宣旨ありしが但しは鬼神が恐れて彼所を逃去しか我ハ此山に止らん人々ハ國々へ歸られよ我命の有ん限りハ變化を尋ね探し出會たる其時ハ又々一札下そへし其時こそハ向ふべしと御暇を給はれハ辞そる者なく人々ハ國を指て歸宅致せしと將軍ハ斯る深山に分入て木の根に取付き足爪立て笹原草原殘り無く去年も今年も亦來る年も尋ね廻らせ玉へ共變化の姿ハ見えさりける將軍思召そ樣鬼神は恐れて逃去しそ何にもせよ我れ觀世音を急き祈らはや

思召し鈴鹿山の絶頂に登り皇城に向て足爪立て合掌し玉ふ城の鎭守には稲荷祇園に加茂春日八幡貴船男山を別て祈らせ給ふには清水寺の觀世音變化の姿を見せしめ給へ鬼神の躰たにも無ならは帝より田村が智畧を引見ん爲と覺へたり某か過ちあらは立所に命を召玉へと三日三夜神慮を深く祈られは目を開きは思案あれは此年月が其間だ尋ね廻らせ玉へは手を懸ぬ草木もなく夏は岩洩る水に咽を潤はし冬ハ雪踏散し尋ね廻りし山なれハ足を立ぬ所もなし去共辰巳に當りて未見もやらぬ小笹原あり將軍公不思儀に思召され彼の笹原に分入て見玉へハ猫の通路やどの細道あり將軍猶も道を傳ひて見玉へハ不思儀や大門有りて八ッ棟作りに檜わた葺の巍々たる殿の見へにける扨も怪しと其所に入て見て有れハ庭にハ金銀の眞砂を敷て龍宮世界も斯や有らんと既に入んと爲けるが否待暫し姿を隠して入らんづと霞の法を結びて屋形の庭の築山や樹木の陰に身を密め段々奥を覗ひけるに三十計りの女房達萬句の連歌と見えにけるそこを打過き見玉へハ廿歳計りの女房達琵琶琴和琴三味線や笙篳篥羯鼓鉦鼓に笛大鼓七句の調べの糸ひにて樂を謠ふて面白く流石に猛き將軍も只恍惚と呆れ玉ふいや隠歴ハ耳に觸れハ此儀ならんと其所を打過き見玉へは二八計りの女房達六七人居揃ひて紫硯に墨を摺流し筆を染め色紙短册哥誹諧文に戀路の色事を千々に案する其風情如何なる内裏上﨟も及ハぬ躰とそ見えにける將軍公浮れて叶ハ

じと叟ゟ打過きは覧在ければ一段高き作殿有り椽先には金銀眞珠金のよふらく下られて吹き来る風にさそはるゝ心を言葉も述られず庭の躰を見て有れは四季の躰をは飾らるゝ先東は春と見えて鶯宿梅や白梅や梅は百梅納朱梅ゎの赤梅八ッ房や萬作鶴題お梅柵引渡る春霞次に櫻を植れてさやう雲櫻や二尾櫻鹽釜櫻や家子櫻虎の尾櫻不賢櫻や口紅櫻大さん木一重山吹八重山吹峰の嵐に吹つれてゑはし櫻も植へられたり松竹梅を植替へて又此方を見て有れは夏の躰泉水築山寳珠蓬萊榮壽山とて三ッの島をぞ飾らるゝ島と陸との道路に玉の反橋懸させて橋の下には唐男我女のうつ魚船浦島太郎が釣の船五色の糸にてからくらせ浄樂我常の風吹けは汀に寄ると暫しは夏の躰とて面白や一ッの島には立ち石伏し石流れ石何を恨んて隔て石貨よ我戀れ〳〵擬干よ見えぬ沖の石君ならは千代も變らで袖留め石綱留め石に戀衣貫にも陸奥幾代の數や四ッの石一ッの石よれ燈火在り是を遙に見渡せは夏ならは螢火の光と疑はれ其躰いと面白し次は秋と見えて關留め流るゝ天の川軒にさやくさゆの徃古も戀ふれ朽ぬ七夕の歌には詠めと年毎に昔れすれ共星の夕躱る夜の數は少なかりける次第之月見の躰の面白し搦枳唐梢皮紅葉小菊を植更て其次こそは冬の躰物淋敷そ打見えて姫小松の其陰に七曲呉竹植られける其下に白き鶴り伏よける冬の景とて暫し時をそ移されたり將軍座敷を見給ひて障子を押開けは白檀磨きの小金星佰恋柱に

香を焚き其香は何々そ蘭麝浮船寶香伽羅よ眞盤沈香數多の香を焚きける香の薫りは上﨟の袖や袂に止めしは極樂淨土も斯や有んと暫し見取れて立給ふ將軍心に思ふ様猶も奥を覗へは七重障子に八重きてふ九重の簾の内是そ誠の立烏帽子と打見へて年の頃は二八計りの上﨟りほふく眉に薄化粧非翠のかんさしくろふして寶ふ春あらは柳の糸の春風にそよと靡ける其風情圧を欺むく顏色に猶も見返し給ふに適れ奇代の上﨟やと滇がに猛き將軍も暫し見取れて扣へたり良有て弓手馬手を作覽有りけれは弓手よは琴三味線數多の双紙を飾らるゝ馬手には劔を三振立られたり將軍今は最期と思召しそはや丸に御手を懸させ玉ひしか扨も敵よ成るならは剛氣我慢の鬼神あらは然るべきとなるに女を敵に持とは何事そ中よ立寄り隨はせんと思召されしり一天子の宣旨を蒙る身て心乱てて叶はじと二尺七寸のそはや丸の鞘を外して障子越しに投給へは女は莞爾と打笑ひ大通連の鞘を外し投掛る將軍あんぢやく丸の鞘を外して投かけれは女は呵々と打笑ひ小通連の鞘を外して投懸る田村のそはや丸あんさやく丸は小鳥と成て飛入れは女の劔は鷹と成て追出す田村の劔は火烟と成て燃入れは女の劔は水と成てゑめしける天よ登り地ゟ下り爭そひ戰ひける將軍今は組ての勝負と思召し小鷹の法を身ゟ纏ひ座敷ゟ飜りと飛入り玉へは女の姿は閃りと消て失せにける將軍今は力無く只忙然と立給ふ時に女の姿顯出て如何ゟ將軍公先に劔

を鞘に納め給へ自も劔を鞘に納ひへし去なから君はそはや丸こんじやく丸の二振ハ自らは大通連小通連是か懸けあふ其内に跡に殘る名劔を投懸る物ならは君の御首は自らが物なれ共御身には觀世音を念じ玉ふ故御姿一目拜み乍より戀の思ひに何と無く心も乱れ惡心和らき善心に基ひてはそ自らは最前よりも御心を能々悟りてはそ敵と是迄發向は剛氣我慢の者なるかと思ひの外女を敵と向ひしは何事そ中に馴れ親しまんと思召されはへ共帝の宣旨を重んじて斯は計らひ給ふハ其御心底惡けなし自らは忍居はへ共神國の有難さに今又ば目に懸りしハ一目拜し給ふより思ひの煙り立登り君ならて誰にか契り結ふへ〻奥州切山に住家をなそ大竹丸と夫婦になり日本の人種を取尽さんと文章を三度遞りてはえ共未た返事のはれす是こそ君の御仕合せと思召せ居坐先是へ此方へと近寄けれは諸軍も今は心も打解て淵は瀬と成る世の習ひ月日は替らせ給ふ共爭て心は變らじと御手を取せ給ひつゝ一間に入れは女房達銚子土器取出し御装束を改めて三々九度の御酒宴は下紐解ひての手枕に二世と誓ひを契りける是と乍も將軍は觀世音の御利益て和國の惡魔を平けさせん其爲めに斯くは契らせ給ひける立烏子は惡心を去り善心に歸り玆の惡魔を御退治有りての將軍の御智略適れ譽れの賢君なり

其後將軍御夫婦の人々は余り淋敷徒然に琵琶を引せ哥を詠じ詩を作り愛を増て幾千代懸て御契さあれば立烏帽子は早や懐胎となり給ふ七月八月も早過て九月苦み當る十月となれは御産の紐を解給ふ御子を取上見給へは玉の樣なる姫君ハ則ち御名は小林姫と號け參らせて御乳母を數多付け能々傍養育なされける昨日今日とは乍せ共月日に關守あらされは小林姫は爪才の秋の頃將軍公は南表へ出させ給ひ四方を詠めて在しまそ二ッ連たる雁のねか都の方へ飛て引く遙に是をば覽して御心に思ふ樣鳥類たにも其時節を忘れずして秋は古郷へ歸るハ夫に反し我れ只一人六年余り魔女と夫婦の契りを込め骨肉を分ちし姫を持つ身は何事ぞ都にて田村將軍は變化の共爲に世に無き者と思ふらん左ある時は和國が魔國と成るへしと上下の僧侶鎮まらず來る八月五日には必す上洛致すへし其折に内裏にて彼女を討せんと神通の法を以て雁を霞に止め置き文に細々と認められ投上け給へは雁りねか中にて是を受取て羽かへの下にかい込て都の方へ飛て行く斯て都に達して紫宸殿と清凉殿の合の御庭に落しける折節公卿大臣參内有て彼の文を拾ひ上るせ讀せ給ふに年八よきの文なれは扨々田村は此世に無き者と思ひしに未だ此世に有りけるか來る八月五日には魔女をつれ參内し内裏にて軍兵共に討せんと細々と書て送られたり此事を帝へ奏し奉るに帝御感甚淺からず田村は魔女を伴ない來るの目出度さに去れは軍兵に事の次第を觸られければ一原松岡を始めとして一萬余騎を用意して八月五日を今や遲しと待居たりき是は扨置き

叟ふ哀れを止めしハ田村公ふてひ〻都へハ魔女をつれ參內し軍兵共に討せんと奏聞致しひねど又此年月の契りをハ互ひふ見えず見へられつ比翼連理の睦言ハ何れの世ふか忌るへき八月五日も程近し兎やせん角や有らんと衣被きて伏給ふ立烏帽子ハ見給へて御枕元に立添て何とて宿らせ玉ふぞや將軍此由を聞召され古郷のとを思ひれて片時ハ熟睡ひぞ來る八月五日にハ上落致さん其節ハ御身も伴ひて參內と奏聞ナてひねバ神佛を拜み給へと仰せける鈴鹿ハ是を聞よりも兩眼ょ泪を浮べてハ恨しの我君よ骨肉分し小林姫のひへと又も自らとを魔女や悪鬼と思し召れ給ふかや過し頃雲井を雁か飛行しを君ハ神通にて止め置き御文認め都に登らせし依り都ふてハ來る五日ふ田村が魔女を伴ひての參內を今や遲しと待居たり自らハ其軍兵抔にハ討る丶身ふて余もあらぞ殊ょ自らハ梵天王の生れょて諸神並佛拜し居り又日本の王城を踏み並佛信心をする身か容易く討きひまじ去れとも君ハ妹背の語らひを忌れ玉ハぞ自らを失ハんとを愁ひさせ玉ふの嬉さよ武士ハ僞り無きを元となす早や疾く上洛有へしと田村公の御手を取り一間ふ移し奉る時の裝束改て高輪車とて神通の御車に召れ雲井遙に登らる丶三時計りょて內裏へと着ふけり急き參內有り右の次第を奏聞有れハ帝叡感在て夫ふとの御諚にて田村夫婦を御階近く召れ御簾高く卷揚させ叡覽あり諸家北面の武士に至る迄我も〳〵と御出坐有り田村ハ觀世音の再來日本無双

の賢美之立烏帽子ハ七千余たんの其姿如何なる內裏上﨟も及ばぬ躰とぞ見へにけり帝よりの宣旨にハ如何に年人汝世に無き者と思ひしに參內すると神妙之扨又立烏帽子汝ぢ女の分として神國を魔國になさんと計るハ何事ぞや鈴鹿ハ承り仰せを陳ぞることならず魔國に為さんと一旦は天下りてはひ得ど年人公に馴染て惡心去て善心よ立戻りてひ得は指て御咎めひ問敷諸事は田村に問はせ給へと其後物は云ざりける帝よりの宣旨には年人は觀音の再來と聞く然れは魔女と夫婦に成ると日本長久の基ひ之相らず田村䔥か妻女と宣旨あり田村夫婦は愼んで御請有けれは重ねての宣旨には天下の政道執行ひ國土豐かに治むへしと宣旨にて冠裝束玉はりける將軍とは有難しと三度戴き內裏を退出されける此事四方に隱れ無し霞野忠太二百余騎にては迎ひに罷り出さゞめき渡りて二條へ入せらる積り／＼の御物語り打解て今一入の御慰みと成り玉ふ時立烏帽子此樣如何に我君自らハ此誠に叶ふまじ明日にもあるあらハ鈴鹿山へ歸らんと五十日も立ざるに男山の八幡より帝へ神使あり近江の國蒲保ヶ原に住家をなす明石高丸高ゆろふとて恐敷き鬼神住めり是を退治仕つれとなり我君ハ討手を蒙り玉ひ安々と御退治坐在べし其時自らとハ罷り出御目に懸り申へし先夫迄はと伊勢國鈴鹿山へと歸らるゝ其後將軍公國家泰平に納めけり立烏帽子か言に違はず男山正八幡より帝へ神使ありけれバ年人を召との宣旨よて時の裝束花やかに參

內し御階近く畏る帝の宣旨よは度々太儀なるとなれど近江の國蒲保ヶ原に明石高丸と云へる鬼神住家をなし人民に妨害なすに依り疾くに退治仕れとの勅宣之依て二萬の兵を指添らる將軍ハ謹んで御請申上げ二條ゑ歸らせ其後に霞野忠太を始めとして二萬三千余騎を卒ひて鎧腰卷太刀脇差色々の名馬に打乘て御供揃ひと聞えける御大將時の裝束花やかに軍兵引具し江州蒲保ヶ原へと發向あり彼所になれハ爰か鬼神の住家よな此所ヶ變化の岩屋ぞと踏入り尋ぬれど更に住家の見えざれバ猶奥深かく尋ねしに爰に怪やしき岩穴あり夫れと用意し斷廻れハ高丸是を見るよりもヤア六十疋の子供六百疋の惡鬼共何れも蹴散せと下知すれは鐵杖劍打振て一度にどつと亂入し追つ追れつ火花を散して戰ひける二萬余騎の官軍て皆散々に討れたり年人此樣を御覧して鳴呼口惜やと大弓を引詰め射懸れハ有難や田村か矢先千手觀音の御誓ひ一矢放ては千の矢先とあり雨や霰れの降る如く鬼神の勢に射掛れハ眷属殘らず討れけり高丸今は十六疋に討なされ愛山指て逃よける傳教大師我立山とて追出ぞ力及はず高野山へと逃走る弘法大師ハ銘白歸白の法を結んて投けれは戸隱山へと逃けるが神罰あらたかに在坐ハ是も叶はずして常陸の國鹿島の浦へと逃よける鹿島大明神の神罰あらたにましまぞ所へ將軍二百餘騎にて追て下らせ玉ひ指詰め引結め放つ矢は雨や霰ぞの降る如く鬼神ハ叶はしとや思ひけん唐と日本の汐境に大聚ヶ岩屋と

て浪打ち懸る岩屋に逃入て石の遣戸をはつたと締忍びて是に居たりける將軍は今の行方を見失ひエヽ口惜や二萬餘騎の兵卒も僅か二百騎と成たり扨も無念の次第之と呆れ果てぞ立玉ひぬ斯る所ふ又立烏帽子忽然と顯れ出如何ふ將軍公高丸を討漏し嘸や無念と思そらん去なから自のら智略ふて討せ參せん唐と日本の汐境に大嶽か岩屋とて浪打懸る岩屋に閉籠ていえれ早やとく急がせ玉へと申上く將軍聞召し其儀ふら兵船を用意なし船ふて寄んと仰せける立烏帽子申樣是れ自らに御任せいへ自らが神通にて討せ奉らん二百余騎の諸軍を皆御暇を玉れるへし田村も實もと思召し諸軍勢ふ御暇玉はり皆國々へと歸りける其後御夫婦ハ高輪車に打乘て雲井遙ふ登らるゝ翌日午の刻ふは唐土和國の汐境ひ竹羅ヶ沖に止りける立烏帽子ハ指さしてあれなる浪打懸る岩屋の内に高丸親子忍びていえ將軍聞召し然らは是より對て取ん立烏帽子聞召し心安く爲射奉らんと天に向つて三度招き玉へハ十二の星天下り星舞樂を催され靈香薰し花降て笙笛聞へいと面白く有難かりける次第之去ハ八大龍王羽立田龍王坂田龍王發檀龍王龍神達は數千の眷屬を引連〱浪間に頭を並へ五衰三熱の苦現を免かれ星の舞樂を拜みける高丸か娘の末子にさヨたの前とて今年百六ッになる稚子あり高丸に縋付き如何ふ父上あれ天竺十二の星の舞拜み玉へ父上一目と申ける高丸聞て愚ゥ之星の舞樂にいれず人間の田村が身にて寄れる稚子舞と覺へたり必ぞ

〱遣戸を開くふと猶も嚴敷扉を押へ塞ひ〱へて居けるにぞ子供ハ猶も縋り付如何ふ父上十二の星の音樂有難や情も知ぬ父上ぞやと縋り付てぞ泣にけり高丸今ハ笙笛に心を浮され石の遣戸を細目ふ明け片目に懸て拜めとて猶も用心嚴敷し半時計り拜みける星の舞のとなれハ苦しみを免かれて面白さに高丸も耐へ兼ね石の遣戸を押開き十六疋頭を揃ひて拜みける立烏帽子は是を見て早疾く向はせ玉へと白羽の矢を奉れは將軍弓に矢を番へよつ引て放つ矢は有難や數千の矢先となり鬼神殘らず討れける將軍車より下らせ玉ひ高丸か首を取り元の車ふ移らせ玉ひて三日三夜ふて伊勢の國鈴鹿山に着玉ふて小林姫ふ會ゐらせ稍り〱の御物語りて今一入の御悦ひと成玉ふ將軍御二方の御威勢目出度かりける次第之去程に將軍公丑寅の方を御覽し玉ふふ八尺余りの光る物在も恐ろ敷見ゐしを將軍不思議に思召され如何ふ立烏帽子あれハ如何ふる物あるぞ參いれ彼れハ自らが文を下せし奥州磐井郡達谷の窟ふ住居なす大竹丸とて高丸に倍し三明六通備ハりたる鬼神なり自らが文を通ハせしに引替へて君と契り深けれハ自らや御身等を憎みて斯ハ眼を光らそゑと申上く將軍聞召し其儀ふら只一矢ふ射て與んと御座を立玉ふ立烏帽子ハ押止め去ハ陸奥霧山の天上より白眼まなてよいへは爭てゥ叶ふまし自らが誑かりて安々と射せ參らせん程に御暇玉れるへし陸奥へ下り磐井郡ふ罷り越仮ふ契りを込て謀計を致さん早やは暇玉

れるべしと申上將軍夢の心地にてこれ何事そは御身陸奥へ下り大竹丸が城の奥り深くして御身の心替りなれは我は何とあすへきそや別に思案のあらさるかと打去かれてそ仰せける立烏帽子是を聞悲くの君のは詮かな恐敷き鬼神に君を替奉らん骨肉分けたる小林姫の有る中て如何に心の變そへき諸神諸佛に誓つても何とて偽り申へき只大竹丸退治の為なれは早は暇給はるへしと申上將軍聞召され今は至極の道理止へきも有されは其義に任そとは詮といさ其儀なら將軍公は上洛そまし〳〵て高丸退治を奏聞ありて天下を太平に為さるへし然らは半年過ささる頃に加茂の明神なり帝へ神使有へし其時君は討手を蒙り八萬余騎の軍兵を給はるべし左れとも軍兵は皆返されて霞野忠太を只一人は供にて下らせ給ひ四條の橋にて暫し待せ玉へは老人は痩に痩たる蘆毛の馬を引て來るへし價に任せて買取り給へ白川二所の關より彼馬に召れ給ひなは達谷の窟の面の林に止るべし其時に自らは達谷が岩屋を出て御目に懸るべし先つ暫しは別れ申之將軍此由を聞召し去は立別れんと忠給へ共流石に夫婦の別れ故行ては歸り暫し名殘を惜まれ共叶ぬとなれは別を〳〵に成り玉ふ立烏帽子は東を指て下りける然るに將軍公は高丸が首を取持せ都を指て上洛あり頓て都に着けれは直と內裏へ參內在て始終を奏聞有れは龍顔麗しく坐在て今に始めぬ田村が忠勤高丸が首をは對し込て流そへしとの御詮なり頓て御暇を玉はり內裏を退出有て夫よ

り高丸が首を私かに對し込み叡山の慈玄座主の引導にて難波ヶ浦へ流させ玉へは重ねて子細は無りける其後國土安穩に治りける時に立烏帽子が云し如く加茂の明神より帝へ神使有て奥州磐井郡達谷ヶ岩屋に大竹丸とて鬼神の住み來年の夏頃にも成ぬれは都へ荒れ出れは玉躰危し早疾く討手を下すへし神力添て得させんと宣ふ御聲の下よりも神使は上らせ玉へは帝はつと驚つて公卿大臣を召れ神使の趣き御評議あり大臣道房卿此度の儀も田村將軍に宣旨ありて然るへしと奏聞し帝叡聞ましまして將軍を召との宣旨之將軍何事やらんと內裏へ上らるゝに帝汝を召條は別義にあらず大儀なから奥州磐井郡の達谷が岩屋に大竹丸と呼ふ鬼神が住み明年の夏の頃にも成けれは都へ登ると神使あり時刻移さず馳向ふて退治仕れとの宣旨にて八萬余騎を添られたり年人兼て期したることあれは勅宣の請申上け大軍にて下るなら國民の歎き如何計り年人一人罷り下りて退治仕らん只將軍に任せられは得と奏しける何とに任すとの宣旨なり將軍畏りて退出あり只此上は信心にしくは無し抑も王城の鎮守には稲荷祇園に加茂春日別て祈らせ玉ふには清水寺の觀世音伊勢住吉を始として日本四十八ヶ所に神馬を引せ賜はれと深く祈誓を込られたり然るに烏帽子の云し如く白髪の老人蘆毛の馬を一疋引來る將軍御覧し如何に老人其馬は賣馬哉かと仰せければ參いと答ふ其儀なら二條の御所へ引來れ價ひに任せて買取べし老人の悦び限り

無く今宵一夜は老の命を繋き申さんと申ける故に將軍公聞召し其儀あらは今宵一夜は飼馬せよと
て別れて其夜の明るを待居たり斯て夜も明けれハ二條の城に引來り將軍御覽し夫にと有て赤鎧
三貫砂金千金玉はれ有難し〳〵と小腰をそらして押戴き其儘炎ハ消にけり將軍ハ霞野忠太と諸
共に早裝束を改めて御門出を祝しける斯て將軍二條をハ夜ハほの〳〵と白川や祇園林の村烏變
化の物に逢坂の關の明神伏拜み其昔蟬丸ハ茲に捨られ玉ふとや博我の三位と云ひし人雨のよる
夜も降ぬ日に風の立日も立ぬ日も三年通ハせ玉へつ〳〵琵琶琴山と傳へしも舊跡とと打詠め小野
小町ハ百年の齢ひ呉竹の杖に縋りてよろほへ立出關位越ると詠しも今こそ思へ合せたり聞いや
嵐に粟津ヶ原戀敷妻に近江路や瀬田の唐橋打渡りすそにいたこ森山の片田の落雁あれとかや石
山寺の晩鐘にいかみ山とハあれならん鏡ヶ山に照月ハ是を誠に洞庭の秋の月とは是そ迚大摺張
に小摺張寐の夢は醒か井の青墓宿に來て見れは袖に涙は垂井か宿笠着て忍ぶ鏡か宿質に陸奥の
花も咲なん軍瀬川尾張の熱田に着玉ふ此明神を伏拜み地領を過れハ程も無く三河に懸し八ッ橋
を早打渡り奥州の大竹丸を退治する矢矧の宿を早過て濱名の明神伏拜み夕川橋に入汐のさ〳〵ね
と登る海士小船さゝんざ諸ふ濱松の大天龍に小天龍渡られ金谷の宿を過き思へ流る〳〵大井川島
田川原を打過て花は咲なん藤枝や蹴揚て渡る鞠子川一ッ二ッと宇都のや府山邊の端を清見ヶ關

に出玉ふあれ〳〵三保か崎互ひの涙も白雲も今一入の御慰み蒲原油井を打過て相模川を打渡り
三島の宿に着き玉ふ大明神を伏拜み浦島か明て口惜き箱根山大權現を伏拜み大磯小磯早過て神
奈川渡れは程も無く武藏下總の境ある浮世に澄る隅田川此武藏野に來て見れハ月の入べき山も
なし霞の懸らん森もなし幸手程なく粕壁の坂打過て鬼神をいつか宇津の宮妻諸共に喜連川花咲
山を打過て白坂越て程もなく境の明神に着玉ふ爰へも參詣坐在て去ハ敵に任せんと件の馬に召
れける其馬の早きと三ッ羽の矢を射る如し忠太ハ尾筒に取付て矢吹新田も早過て日出の山科信
夫山墨摺り流る瀧川や半田の小風袖に留め伊達の大木戸鎧越し松岡ある子捨川白鳥明神を拜し
つ〳〵大高宮にに月は入間の玉崎や名取川をも越玉へ見上て通る茂ヶや廣瀬川をも越玉へ鹿子濟
水に晴薬ヶ崎に差懸り龍門山に着き玉ふ時に將軍公は霞野忠太を召れ如何に盛春承れ此御寺こ
そ我れ先年勢熊と云し時學文致せし道場之懸る序でに參詣せんと思召し御寺へ入せ玉ひつ〳〵言
の葉を最と念頃に御祈念ありて立出見れハ大澤や早今村の戀風に誘されハ人の身の上と千本くの
木赤崎や大明神を伏拜み高瀬川をも越玉ひ古川寺に着き玉ふ抑も此御寺とすハ鹿島大明神の御
社之天平寶字の頃大野朝臣東人と云ふ人是を開基之玉ひて古河寺と書き古川寺と讀するなり御
歌に

古川や水の寄瀬ハ龍田川ゑるもゑらぬも相生の松

將軍も斯計り日の光古川寺に移しつゝ鹿島の神我を守らんと遊ハして江合川田邊の里飯の社を伏拜み一二の迫龜打坂青笹峠打過て盤井郡ゐ隱れなき一二の關や岩井川をも越玉へ達谷か岩屋の邊に着玉ふ暫し馬を乘放し息を繼き玉ふ懸る所に立烏帽子約束の如く忽然と顯れ出て御對面坐在て御物語り限り無し去なから大竹丸は天竺初座王に出仕の爲め昨日午の下刻ゐ立出し明日の申の下刻にならてハ歸りいハず岩屋の內へ入玉ひて緩々御休息在坐へし先此方へとは手をとり岩屋の內へと入玉ふ然るに九十六疋の眷旗手長足長天飛稻妻阿毘羅絕式部島杯といふ數多の眷族是を見て夫溢れ者餘さしと劔や鐵杖を打振て一度に門と討て掛るを鈴鹿ハ此由を見るよも神通の法を掛置きて今宵は旅の勞れ何のは氣支はいはし緩々は休息いへと夫より田村は夫婦の人々ハ穴奧へ入玉へ絕て久敷は對面互ひにかはそ手枕のは物語りハ限りなく斯る所に大竹丸ハ神通ゐて是を知り道より取て歸り岩屋の扉を打叩き大音聲にヤア眷屬共早疾く岩屋を開くべし眷屬共と呼べ共答へさりける大竹丸是を見てエヽ口惜や神通のはゑめに掛りしか出し超して取せんと口より火煙を吹かと見えしか岩屋の扉みぢんになり九十六疋の眷屬一度にとつと馳出る將軍は覽しそはや丸ゐんぢやく丸の鞘を外して投掛れハ立烏帽子も大通連小通連劔明連等

の鞘を外して投掛けきば惣して五振の劔ハ天地四方へ切廻る九十六疋の眷屬一騎も殘らす討れける大竹丸大ひに怒つて岩屋も崩る大音揚け死人を見てハ大願成就せそ神通を改めんと云ふうと思へハ影も姿も矢にける田村將軍ハ是れハと計り暫し忙然たり立烏帽子ハ完爾と打笑ひ鈴山か絕頂ゐ籠りていひ得ぺ直樣追駈玉ふへし神通無てハ叶ふ間敷と劔を鞘に納め鈴山指て追懸る斯て彼所ゐ成けきハ田村夫婦ハ大聲を上けヤア如何ゐ大竹丸卑怯之田村夫婦か來るりや出會せよと呼ハれは既ゐ神通備はつて七面の惡鬼百八の眼を瞋らし九十六の耳を振立て十六の足ゐ踏裂き八十八の手を廣けエヽ口惜や過る年車ゐ乘て都へ來る時夫婦諸共微塵になさんと思ひしに助け置きしハ無念之神通を改めんと思へ共帝とやらんを微塵にゐし其後汝等を憂目見せんと云ふかと思へハ蔭も形も消にける將軍是れハと仰せける立烏帽子ハ聞よりも既に神通備つたる鬼神なれハ最早三時も過きなハ玉躰最と危き之追せ玉へ篦嶽山麒麟ヶ岩屋ゐ神通を改めん早や疾急うせ玉へと篦嶽山へ急きける斯て麒麟ヶ岩屋ゐ着ぬ丸き岩屋のとなれハ何れか戶羽そと知さりける立烏帽子申樣サア此上ハ人間術にて叶ひ難し觀世音薩埵を祈らせ玉へと申上る將軍ハ實もと思召し手水垢離ゐて身を清め天に向て一心不乱ゐ祈りては岩屋の扉に手を當てエヽやつと押けれハ岩屋の扉微塵に碎けたりアラ有難や觀世音光を放ち岩屋の上ゐ立せ玉へハ將軍御夫婦

これ有難しと禮拜を神靈あらたに在坐て心靜かに退治せよ猶行末を守らんと神は消させ玉へけり御夫婦はあら有難と御跡を禮拜奉り心靜かに岩屋に入て見玉へは大竹丸は八方へ鎖を以て繋れたり將軍御覽しヤア大竹丸天罰何如て逃すまし鬼神は聞より岩屋も崩るゝ計りの聲を揚け起上らんとする所をそれや丸の鞘はつし大竹丸か首を討落せは其首は岩屋の內を火焰を吹なからくるり〳〵と廻りしか將軍を目懸け甲の鍬形固かと咥へたる此の時霞野忠太來り是を見て二ツになれと打ければ彼の首は行方知れす成りよける立烏帽子見るより大通連小通連てんじやく丸そはや丸を投懸れは大竹丸か手足寸斷に切落そ不思儀や生臭き風吹き來ると思へは岩屋の震動夥多敷百千の雷も一時に落來る如く雨風も烈敷成れは左なから暗夜の如く也去れ共神力強くして神風さつと吹ければ元の晴天と成にけり其後將軍大竹丸が髑髏をは百姓共に仰付られ佐沼の江へ運ばるゝ將軍御夫婦は大竹丸か首を爰や彼所と尋ね玉ふに出羽奥州の境なる山崎と云所にて拾はせ玉へける其後箟嶽に歸らせ玉ひて制札を改めて建て給ふ是制札の始め也其後實る敵も無しと霞野忠太を止め給へは御夫婦は御車に召れ一先都へ登らんと車を早めて三時計りに伊勢の國鈴鹿山へと着給ふて小林姫には對面有て後に親子主從は物語り限りなし將軍御夫婦は一間に入給ひ今は所々の惡魔を討平け心に懸る隈も無く積り〳〵の憂つらさ打解け睦むも玉ひしに立

烏帽子は何共物は云ずして將軍公の御膝に顏を上消入樣に泣給ふ將軍御覽しては何事そ御身は狂氣志玉ふか大竹丸を退治心に懸るとも無しと思ひしに何とて歎き玉ふそや立烏帽子是を聞何と宣ふ將軍公我々夫婦は如何なる前世の宿業かや今日は變化翌日は鬼神退治迚一日片時も休らはず漸く惡鬼を討平け是迄と存それど爰に悲きとの有り夫を我國の習ひにて下の女は廿九歳中の女は廿四上の女は廿二歳自られ上の女にて最早常年十九歳十月五日の卯の刻には空く罷り成ていそ二世と懸たる妹脊と今宵計りよい得ば明暮心も消々と泪にくれていへ今宵計りか悲やと又將軍に縋り付聲を上てそ泣給ふ將軍夢の御心地にて暫し互ひに泣給ふ良有て將軍仰せける樣は十月五日も程近しは身の先途を見屆て其後成れ上洛致すべし名殘は尽ぬ我妻よ惡魔變化を退治せしも皆是れ御身の知畧ゆへは身が空敷成ならは我は何と成へきそと聲を上させ給へける立烏帽子是を聞愚かの君の御諚之都にては上は帝を始め奉り下は卑賤に至る迄田村公此世になからん者ならは日本は魔國に成へしと上下の侶徒靜らそ一刻も早く御上洛坐在て大竹退治を奏聞し御宸襟を休め奉り市街の民を靜め玉へ田村大將軍に御かき給ふ御身に有なから斯く迄名殘を惜ませ給ふに何事ぞと慰めらるゝ其内に夜ははの〳〵と明ければ早や御登りいへし名殘も尽ぬ自られ譬へ空しく成迚も君の御出てなき內は三年四年過るとても色も姿も替らずして待奉りてい

そ御暇給へらバ其時こそ空敷成へきそ骨肉分し小林姫の候得ハ契りハ尽ぬ別れとなれは心に任せぬ憂世やと互ひに暫し歎かせ給へど叶ぬとなれバ将軍御涙を止め給ひて其儀なら約束違ハせ給ふなよ去ハ上洛致さんと名殘ハ尽ぬ我妻とて袖を拂ふて将軍ハ都を指て登らるゝ頓て都に成けれハ直に參內被成つゝ大竹退治を奏聞あれは帝御感限り無く誠に田村は人間の所爲ならす此度の御賞として東海道十五ヶ國永代安堵給はりては盃盞を下され重ねての宣旨よは箇様の悪鬼を退治なし跡の祟りが如何ならん是より奥州よ下り如何成る神に佛に灌頂し悪鬼を封し込て來るへしと宣旨ありし将軍畏りて退出し中納言道明卿と連れ立給ひて叡山の天台座主慈覺大師諸共よ再び奥州へは下向ありて頓て磐井郡に成りけれハ達谷の岩屋を引平け百八躰の見沙門御建立相成り夫より達田郡篦嶽山へと登らるゝ岩屋を築ぎ大竹丸か首を塚に築込み其上に觀音堂を建給ふ慈覺大師の御作佛一寸八分の十一面觀世音を建給ふ無夷山金梵寺と額を上げ無夷山とハ恵比須無山と書せたり宮城郡富山にハ大竹丸に是を築込み觀音堂を建玉ふ牡鹿郡槇山にハ大竹丸か胴を封じ込み觀音堂を建玉ふ夫より佐沼の郷に大竹丸の死骸を埋たる所を三尺土を取て流す大竹に手を築込て觀音堂を建玉ふ去るに依て此所を大竹村と申え篦嶽富山槇山大竹觀世音ハ大竹丸に死骸を封しこむ是れ奥州の靈地之以上改る所も無く依て都へ上洛有りて參內成され始終

の奏問あるバ帝叡聞坐在てハ感甚た限り無くハ賞玉ハりて退出なし夫より将軍公伊勢の國鈴鹿山へと急かるゝ鈴鹿山よ着けれハ直にハ殿よ入玉ふ小林姫や女房達立出て只今ハ來臨に候か父上様只今は入候かと歎きの中に喜びける扨も小林姫ハ父将軍に向ハれ母君にハ三年以前の十月五日卯の刻に空しくならせ玉ふと歎き玉へバ将軍大に歎かせ玉ひ一間に入て衣引除け見て有れは菩薩の姿容佛顔眠むる様に伏居たり将軍は側に座し如何に立烏帽子約束なきハ是迄參り候え姿も色も替らすして待玉ふか煩ハしやと顔よ御手を掛させ玉へ髪を搔撫て種々と口說き歎かせ玉へけるあら不思議や立烏帽子は目を開かれてあら珍敷や将軍様ハ約束違ハすよは出有し嬉しさよ御約束にて候へバ姿も色も替らずに待奉り候えそハ別の子細に候ハそ形身を送らん其爲なり大通連をハ我君に奉り小通連をは內裏へ納め奉り宗志寳劔內待所と諸共よ日本の寶と成され劔明連と申せしハ代々家に傳ハる劔なれハ小林姫よ取らすべし形身ハ人の無き跡の菩提の種と聞からに數多の寶の候を女房達に參らせん自らを思ひ出せし度每に念佛なして玉ハるへし如何に小林姫親子ハ一世の緣なれハ是か別れの物憂よ父上様にハ猶も孝行仕れ母か菩提も吊へよ名殘惜しの将軍様最と惜しの小林姫や切て此姫十五歳にも成しならハ田村の家を繼せてたべ是迄成りと言ふかと思へハ色も姿も替り來て見るに哀れの增りける将軍親子にハ袖や袂に縋り付歎

む歎かせ玉へ共其甲斐更に無りける將軍涙を押止め一度人間の我に契りを込けれハ和國の禮を行ハんと鈴鹿の麓に送られ千駄の柴を積み無常の煙りとなし貴きハ僧に引導せしめ千本の卒塔婆を立てハ弔ひけり去れ共將軍公ハ夫婦の別れ深くして暫しハ涙止まらず然れと歎きて歸らぬとなれハ將軍公小林姫を抱上け暫し安眠玉ひてハ夢に不思儀や立烏帽子と諸共に山を越へ供に歩むと思ひしか一ッの內裏に着玉ふ時に大王笏を取直し夫れ田村ハ觀世音の再來なれバ死せさる者なり娑婆へ歸すべし女共ハあらざる分限にて悪事なしたる罪により火鉦大國へ落をべし田村將軍承り佛の盲棄にも夫婦ハ二世の契りとあり女に科の有ならハ夫の我も科在へきに我を歸され女も歸し玉へと奉したり大王ハ聞有て田村ハ觀世音の化身にて和國の悪魔を退治たり其功に依て早疾く歸しける臣下大臣是を聞去ハ尾張の國志賀の里に金岡八郎の一人姫小松の前ハ七日前に空敷なり父母悲しみ歎かれて未た此土に送らぬを是れに立烏帽子の心を入替てたひ玉へと奏聞す大王ハ現在なれや〳〵と錫杖振給へハ田村の夢ハ覺にけり枕を上けて見給へハ八ッ棟造り檜皮葺の屋形もなく女房達もいハず鈴鹿山の澤奥に石を枕にして小林姫を抱き宿り居れり將軍大に驚き扨不思儀やと思へ共元より變化のとなれバ屋形とても有間敷去ハ都へ登らんと小林姫を伴ひて都を指て登られける斯くて金岡八郎が娘の小松の前ハ一度空しく成られしも七日

を經て再び蘇生有りけれハ親子悦び限りなかりし夫れ偖て將軍ハ上洛ありて直に內裏へ參內ありてハ階近く畏り有しとと奏しける帝叡聞有て金岡八郎を召れける八郎ハ命に隨へ何事やらんと參內し有し次第を奏聞を田村が無常の物語りと割符を合する如くに帝叡聞坐在て金岡八郎が娘を田村年人が妻女とすへしとの勅使に將軍金岡ハ有難しと內裏を退出を其後小松の前を田村の方へと送らる〻姿ハ小松の前なれと心と魂ひ立烏帽子再び契らせ玉へける去に依て小松の前を先立て度々の悪魔をハ退治有り小林姫十五の春の頃大納言年秋公に御緣を結ばせ玉ひ田村將軍年宗と任せられハ代を讓らせ御隱居せられ將軍八十四歲にてハ他界ならせれ勢州鈴鹿山の麓に田村大明神と祭られ末世の衆生を守らせ玉ふに去程に小松の前ハ九十六才にて薨去あらせられ鈴鹿山に移し鈴鹿大明神と崇めバ末世を守らせ玉ふ之是に依て田村大明神鈴鹿大明神ハ妹脊の御神と祝ひ奉る小林姫ハ百十六歲にて六位の地藏と顯れ給ふ惣て京都音羽山淸水寺をハ建立あり大同二年又奧州の篋嶽山富山槇山大竹達谷ヶ岩屋に百八躰の毘沙門鬼首白山權現迄して日本二百十ヶ所の觀音堂御建立在たり是と言も日本神國なるによりて變化悪魔の退治に神佛現れ玉ふならん誠に田村將軍のハ繁昌天下泰平國家安穩百皇五穀のハ祭り月に重なり日に増て目出度かりける次第なり

田村三代記大尾

明治廿一年四月六日印刷竣功
明治廿一年五月八日飜刻出版

飜刻
發行者　東京府平民
松本幸三郎
淺草區茅町壹丁目十弐番地

印刷者　長野縣平民
上原東一郎
京橋區加賀町十七番地

發兌元
佐勘書店
仙臺國分町五丁目

091048-000-3

特10-901

田村三代記

松本　幸三郎／刊

M21

DBN-1824